

福井県埋蔵文化財調査報告 第124集

福井城跡

— J R 北陸線外 2 線連続立体交差事業(福井駅仮跨線橋工事)に伴う調査—

2 0 1 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

福井城は、徳川家康の次男結城秀康が、越前統治の本拠として慶長6年（1601）から6年あまりの歳月をかけて造営した、典型的な輪郭式平城です。現在の福井市街は、その城下町を基礎に発展してきましたが、その過程で市街地整備や福井空襲・福井震災などの災害、さらにそれからの復興事業などにより、城下町の面影はすっかり失われてしまいました。現在では、本丸跡の石垣と内堀だけが、往時の姿を留めています。

しかし、近年になり、市街地で地下駐車場整備事業・市街地再開発事業等が進められ、それに伴う調査により、かつての福井城の様相が少しずつ明らかになってきました。この度、J R 北陸線外2線の鉄道路線の連続立体交差事業の着手が認可され、遺跡の破壊の恐れのある地区について、発掘調査を行いました。そのうち、福井駅仮跨線橋工事に伴う調査について、その後の遺物整理事業も終了し、ここにその成果を報告できる運びとなりました。

調査では、武家屋敷地とそれに関わる井戸・園池・ゴミ穴等の遺構群を確認しました。また、多数の陶磁器、漆器碗や箸・下駄などの木製品、硯・砥石や笏谷石を加工した多様な石製品、鉄鏃や建具金具などの金属製品など、当時の武家の生活を窺い得る遺物が出土しました。

今後、これらの資料が、福井城の歴史を知る手掛かりとなるとともに、本書が、学術研究・郷土史研究・学校教育など各方面で広く活用されることを願って止みません。最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を頂きましたことに、深く感謝申し上げます。

平成24年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 佐 藤 圭

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターがＪＲ北陸線外２線連続立体交差事業(福井駅仮跨線橋工事)に伴い、平成９年度に実施した福井城跡(福井県福井市中央１丁目所在)の発掘調査報告書である。
- 2 福井城跡の調査は、福井県駅周辺整備事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、河村健史が担当した。
- 3 発掘調査は、平成９年９月11日から11月８日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成13年４月１日から平成23年３月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は中原義史があたり、本多達哉、中原、御嶽貞義が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下のとおりである。
本多 第４章第３節 中原 第１・２・３章、第４章第１・２節、第５章 御嶽 第４章第４・５節
- 5 福井城跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 遺構の図版作成は、青木隆佳、河村、中原が行った。遺物の図版作成については、土器・陶磁器は青木・河村が、木製品は本多が、金属・石製品は御嶽が行った。土器・陶磁器の製図・写真撮影については、株式会社総合文化企画に委託した。木製品の写真撮影は本多が、金属・石製品の写真撮影は中原が行った。
- 7 本書に掲載した遺構図は、株式会社パスコに委託して作成したものを一部改変して使用した。また、掲載した空撮写真は、写真測量時に前記業者が撮影したものを使用した。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は一致する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標第Ⅵ系に基づく。
- 10 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 発掘調査には地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。
- 12 福井城跡の調査区番号は、遺跡の略号F K J と、調査年次およびその年の福井城跡関連調査順番号からなる。今回の調査区番号は、F K J 97-11である。
- 13 本遺跡の所在地は、中世から柴田勝家の時代、さらに結城秀康入国後の17世紀初めまで、「北庄」と呼ばれていた。その後、寛永元年(1624)に「福居庄」「福井庄」へと改称され、さらに元禄年間(1688～1704)から「福井」が広く使われるようになっていった。しかし、このような変遷を記述に反映させると煩雑になるため、本書では柴田勝家築城の城を北庄城、結城秀康築城の城を福井城と表記し、遺跡名としては北庄城の時期を含めて福井城跡と総称する。また、慶長６年(1601)の結城秀康の越前入国・福井城の築城開始を以て近世の始まりとする。
- 14 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に拠る。
- 15 第３図は「福居御城下絵図」1320、第25図の(１)は「御城下絵図」1319、同(２)は「福井分限之図」1340を基に作成した。原本はいずれも松平文庫蔵(福井県立図書館保管)の資料である。
- 16 第26図は福井県立歴史博物館蔵の福井駅構内図を基に作成した。ただし、同図は構内の改築・修繕に伴って作成されたものであり、すべての施設が描かれているわけではない。

目 次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 遺 構	
第1節 堆積状況	3
第2節 遺構各説	3
第4章 遺 物	
第1節 土器・陶磁器	12
第2節 汽車土瓶	21
第3節 木製品	22
第4節 金属製品	25
第5節 石製品	25
第5章 まとめ	29

写 真 図 版 目 次

図版第1 遺跡	(2) 遺構31(西より)
(1) 調査区周辺(北より)	(3) 遺構32(西より)
(2) 調査区全景	(4) 遺構33(西より)
図版第2 遺構	図版第6 遺構
(1) 調査区全景(南より)	(1) 遺構02(西より)
(2) 調査区全景(北より)	(2) 遺構04(北より)
(3) 噴砂痕跡(南より)	(3) 遺構11(東より)
(4) 遺構41(東より)	(4) 遺構25(東より)
図版第3 遺構	(5) 遺構25(西より)
(1) 遺構19および石堤(東より)	図版第7 遺物 土器・陶磁器
(2) 遺構19および石堤(北より)	図版第8 遺物 土器・陶磁器
図版第4 遺構	図版第9 遺物 土器・陶磁器
(1) 遺構19南岸集石(北より)	図版第10 遺物 土器・陶磁器・金属製品
(2) 遺構19南岸集石下の木組み(北より)	(1) 土師質皿
(3) 遺構19南岸集石下の木組み(東より)	(2) 金属製品
(4) 遺構19北岸階段(西より)	図版第11 遺物 木製品
(5) 遺構40および石堤断面(西より)	図版第12 遺物 石製品
(6) 石堤(東より)	
図版第5 遺構	
(1) 遺構30(西より)	

挿 図 目 次

第1図	調査区の位置図(1) ……………	1	第14図	土器・陶磁器実測図(遺構12・13・17①) ……	16
第2図	調査区の位置図(2) ……………	1	第15図	土器・陶磁器実測図(遺構17②・焼土層①) ……	17
第3図	福井城構造図 ……………	2	第16図	土器・陶磁器実測図(焼土層②・遺構19) ……	18
第4図	時期別遺構配置図 ……………	5	第17図	土器・陶磁器実測図(遺構14・24・包含層) ……	19
第5図	調査区西面土層図 ……………	6	第18図	汽車土瓶実測図 ……………	21
第6図	調査区東面土層図 ……………	7	第19図	漆器実測図 ……………	22
第7図	調査区東西土層図および 遺構40立・平面図 ……………	8	第20図	木製品実測図1 ……………	23
第8図	遺構12・19・41 平・断面図 ……………	9	第21図	木製品実測図2 ……………	24
第9図	遺構01・02・10平・断面図 ……………	10	第22図	金属製品実測図……………	26
第10図	遺構04・11・25平・断面図 ……………	11	第23図	石製品実測図1 ……………	27
第11図	土器・陶磁器実測図(遺構02①) ……………	13	第24図	石製品実測図2 ……………	28
第12図	土器・陶磁器実測図(遺構02②) ……………	14	第25図	屋敷地割り変遷図……………	30
第13図	土器・陶磁器実測図(遺構04・05・10・11) ……	15	第26図	福井駅構内の施設と 調査区の位置図 ……………	30

表 目 次

第1表	遺構観察表 ……………	4	第6表	木製品観察表 ……………	23
第2表	土器・陶磁器観察表 ……………	19	第7表	金属製品観察表 ……………	26
第3表	汽車土瓶観察表 ……………	21	第8表	石製品観察表 ……………	28
第4表	遺構14出土汽車土瓶銘文一覧 ……………	21	第9表	調査区付近の屋敷地割りの変遷 ……	30
第5表	漆器観察表 ……………	22			

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は、福井駅付近のJ R北陸線外2線連続立体交差事業に伴い実施したものである。この事業は、福井駅周辺の鉄道による交通渋滞や市街地の分断状況を解消し、東西市街地の一体的な整備を目指して構想されたもので、平成4年に国の事業認可がなされた。工事予定地は、福井市みのり1丁目から開発町にかけての総延長約3.3kmに及び、そのうち福井駅周辺の約1.4 kmの範囲が、周知の遺跡である福井城跡内を縦断する予定であった。このため、事業主体である福井県土木部都市計画課および福井県駅周辺整備事務所と協議を重ね、高架側道4号線・同5号線・J R福井駅と大きく3つある工事の施工予定に合わせ、それぞれ調査に着手することになった。

最初に、高架側道4号線の試掘調査・本調査を平成8年から10年までの3カ年にわたって行った。その期間中に、駅部工事のため北陸線の仮線・仮跨線橋の設置が行われることとなり、急きょ福井駅仮跨線橋地点の調査を行うこととなった。調査地点は、福井市中心市街地にあるJ R福井駅東側の京福電鉄(株)(当時)の福井駅構内に位置していた(第1・2図)。福井県庁等の立地する福井城本丸跡からは、南南東に400mほどの地点にあたる。試掘調査は平成9年6月30日から7月4日にかけて行い、近世の整地層および遺構を確認した。その結果、橋脚等の設置される473㎡の範囲について本調査が必要と判断され、平成9年9月11日より調査に着手することとなった。

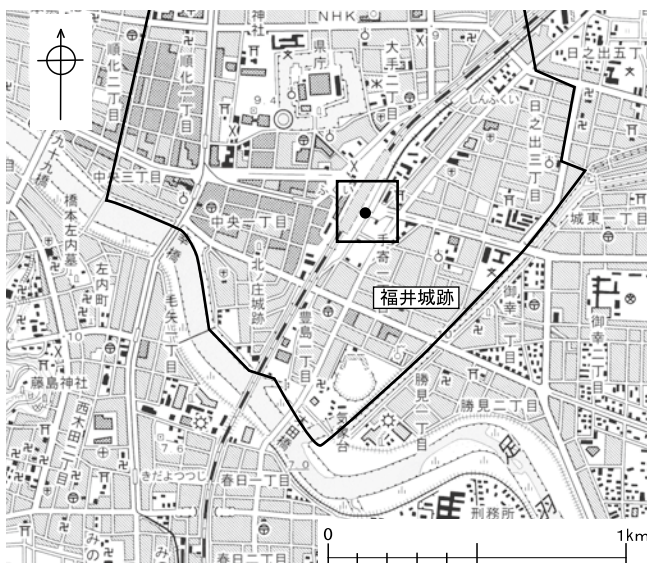
第2節 調査の経過

本調査は平成9年9月11日に開始し、同年11月8日に終了した。以下に調査経過の概要を記す。

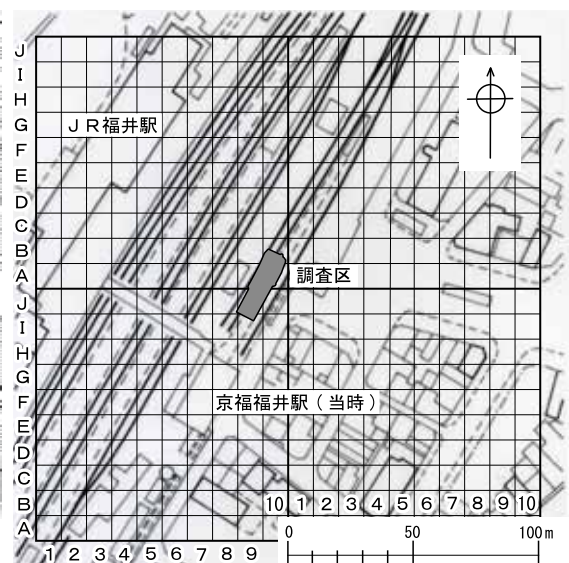
平成9年9月11日/現地作業開始。表土掘削。近代攪乱(汽車土瓶廃棄土坑)検出。29日/清掃・写真撮影。

10月1日/平板測量。遺構精査。17日/畦実測・写真撮影。22日/全面清掃。23日/測量・写真撮影。

11月5日/焼土層畦実測・写真撮影。8日/東壁断面・石組井戸・柱穴列実測・写真撮影。終了。



第1図 調査区の位置図(1)(縮尺1/25,000)



第2図 調査区の位置図(2)(縮尺1/3,000)

第2章 遺跡の位置と環境

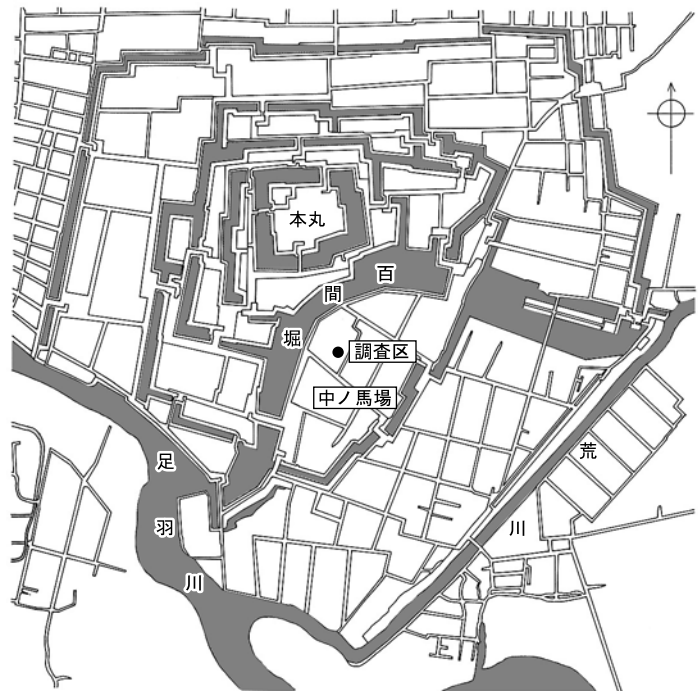
近世の福井城は、慶長6年(1601)に、家康の次男である結城秀康が68万石の領地をたまり、築城を開始したことに始まる。この地は、九頭竜川の支流足羽川と北陸道が交わる交通の要衝であり、一乗谷に本拠を置いた戦国大名朝倉氏も、城館を設けて一族を配していた。その後、朝倉氏を滅ぼした織田信長によって、越前の支配をまかせられた柴田勝家は、この地に越前では最初の近世城郭である北庄城を築き、以後、越前支配の拠点の北庄に移ることになった。

結城秀康は、福井城の築城にあたり、新たに縄張りを行ったと言われている。しかし、福井城の地割には北庄城期のものを踏襲していると考えられる地点もあり、必ずしも北庄城期の構造が残されていないわけではない。築城工事は、慶長11年ころ一応の完成を見たと言われるが、城下絵図の記載や発掘調査成果等から、その後も17世紀後半まで、堀や門の増設・新設などが続けられたようである。

この城下の構造に大きな変化をもたらすことになった出来事として、寛文9年(1669)の大火(寛文大火)があげられる。これにより、本丸、天守をはじめ、武家屋敷379軒や町屋2676軒あまりが焼失した。その復興に際し、屋敷割りの変更のほか、盛土や溝の改修、火除地の設置など、大規模な工事が行われたことが、これまでの発掘調査からわかってきた。また、貞享3年(1686)には、当時の藩主に武家諸法度に触れる行いがあったとの理由で、知行高が25万石まで削減される処分を受けた(貞享の大法)。これに伴って藩士2,000人あまりに暇が出され、武家屋敷地に多くの空き地が見られるようになった。明治維新後、福井城は外郭部から門・堀の取り壊しや堀の埋め立てが進められ、現在では本丸とそれを取り巻く内堀が残るだけとなっている。

今回の調査区は、本丸の東南方向にあり、「中ノ馬場」と呼ばれる曲輪の中心部にあたる(第3図)。曲輪の北西方向に「百間堀」があるが、この堀は築城以前、吉野川(現在の荒川)の流路であった。築城に際し、吉野川の合流点を足羽川の上流へ付け替え、その旧流路を利用して作られたのが百間堀である。新しい吉野川の流路は荒川と呼ばれ、福井城の東南部の最も外側の防衛線となった。調査区は、築城以前、吉野川の自然堤防か、あるいは後背湿地にあたっていたと考えられる。築城後、この地は主に1,000石から500石程度の禄高の上・中級武士の屋敷地が並ぶようになる。その後、調査区付近では、近世を通じて道路や屋敷地割りの大きな変更はなかった。

明治29年(1896)に、北陸線が敦賀から森田(福井市)まで延伸された際に、調査区は福井駅構内に取り込まれたようである。さらに、昭和4年(1929)に、京都電灯(株)の越前電鉄線が新福井駅から延伸された際に、同線の福井駅構内となる。その後、昭和17年(1942)に同社の鉄道事業を引き継いだ京福電気鉄道(株)の駅構内となり、調査時に至っている。



第3図 福井城構造図(縮尺約1/20,000)

第3章 遺構

第1節 堆積状況

調査区の規模は、幅約9m、長さ約28m、面積473m²である。東・西壁の土層断面によると、この付近の地山層は標高6.0～6.5m付近にある(第5・6図)。その上に、ほとんど遺物を含まない層が20～70cmあり、そこに北庄城期の遺構が作られている。この土層が築城期の整地層にあたるのか、中世の堆積層にあたるのかは明確ではない。ただし、近代の攪乱や削平が多く、当時の生活面は失われている可能性が高い。幕末期から明治期初めには、標高7.1m付近まで盛土整地が行われている。これも、以後の削平によって当時の生活面が失われている。

遺構群の年代は大きくⅠからⅤの5時期に分けられる(第4図)。Ⅰ期は、柴田勝家の北庄城築城から結城秀康の福井城築城までのもので、16世紀末にあたる。Ⅱ期は、福井城築城以後の17世紀前半にあたる。Ⅲ期は、寛文大火をはさんだ17世紀後半にあたる。Ⅳ期は幕末期から明治期初めのもので、19世紀半ばから後半にあたる。Ⅴ期は近代の福井駅に伴うもので、19世紀末から20世紀初めにあたる。

なお、調査区の広い範囲で噴砂の跡を確認した(第6・9・10図)。この地域では、昭和23年(1947)の福井地震のほか、安政5年(1858)の飛越地震の際にも噴砂があったとの記録がある^(註)。

第2節 遺構各説

確認された主な遺構には、街区関連のものとして屋敷地境の溝・塀、屋敷地内のものとして土坑・井戸・園池等がある。

溝(第4・8図) 遺構12が検出された。素掘りで断面は葉研状に開くが底部は丸い。幅は約0.8m、東西方向に伸び、調査区東端で終わる。この遺構の廃絶・埋め立て後に、同じ位置に遺構41が作られる。

柱列(塀)(第4・7・8図) 遺構40・41の2基が検出された。遺構40は柱穴30～33で構成され、遺構41は柱穴09・22・27～29等で構成される。いずれも東西方向に伸び、柱間は1.4mである。柱穴の底部に笊谷石製板石を据えた掘立礎石形式のものである。遺構40にはすべて柱根が残り、柱穴31～33の柱根は、一辺11cmの角柱で面取りはない。柱穴30のみ厚さ2cm、幅11cmの板材を立てる。基礎部分は、いずれも方形に近い大ぶりの笊谷石を据え、この上に板石を数枚のせる。さらに、板石と柱の間に木端を挟み、柱の水平を微調整する。遺構12と41は完全に重なり、城下絵図との対照から、共に屋敷地境の遺構と考えられる。

土坑(第4・9・10図) 調査区中央付近で、多数の土坑が複雑に切り合う。まず、遺構16・21・24を遺構01や10が切り、さらにこれを遺構02が切っている。遺構01・10自体も、複数の土坑が切り合ったものとも考えられる。遺構02は大きく2段に分かれ、下段は木質有機物層であり、上段は礫が多く混じる土砂で埋め立てられている。遺構04は出土遺物・断面観察から遺構15に切られており、出土遺物から遺構11と同時期のものと考えられる。

井戸(第4・10図) 遺構11・25の2基が検出された。遺構11はその形状から井戸と考えた。現状では素掘りだが、廃絶時に井筒を抜き取られた可能性がある。土師質皿を中心として遺物量は比較的多い。遺構25は笊谷石積みの井筒を持つ。廃絶時に上半1.2mは井筒が壊され、直径3.5mまで穴が掘り広げられている。さらに、この穴を廃棄物等を含んだ土砂で埋め立てている。このような状況は福井城跡の井戸で多く見られる。

落ち込み(第4・5・6図) 遺構17が検出された。調査区が狭いため遺構の全容・性格をうかがい難い。南北幅は7.8m、東西とも調査区外に続くため土坑か溝か不明である。肩部は緩やかに落ちる。17世紀前半には廃絶に伴い、木端を含む有機物で埋め立てられる(A層)。その後、一部に遺構19が作られ、さらのその周囲には火災によって生じた廃棄物・笏谷礫等で盛土を行っている(焼土層)。その上面には笏谷石を敷きつめて石堤とし、木柱列(遺構40)を作っている。

園池遺構(第4・5・6・8図) 遺構19が検出された。遺構17のA層による埋め立て後、その中央部を南北幅2.5m掘り込んで造られている。北側は笏谷石で階段を作り、東側は笏谷石で護岸し、南側は直径5cmから10cm程度の丸木を堰状に組み、その前面に笏谷石を無造作に積んで、護岸していた。掘り込みの底面には礫を敷くが、化粧用のものとするには粗過ぎる。礫は東側の護岸を越えて続いており、当初は東へ広がっていたものが、後に縮められたものと考えられる。

駅関連廃棄土坑(第4図) 遺構14が検出された。福井城に関連するものではなく、明治期の福井駅関連の遺構である。汽車土瓶など駅で出た廃棄物を捨てたものである。

註

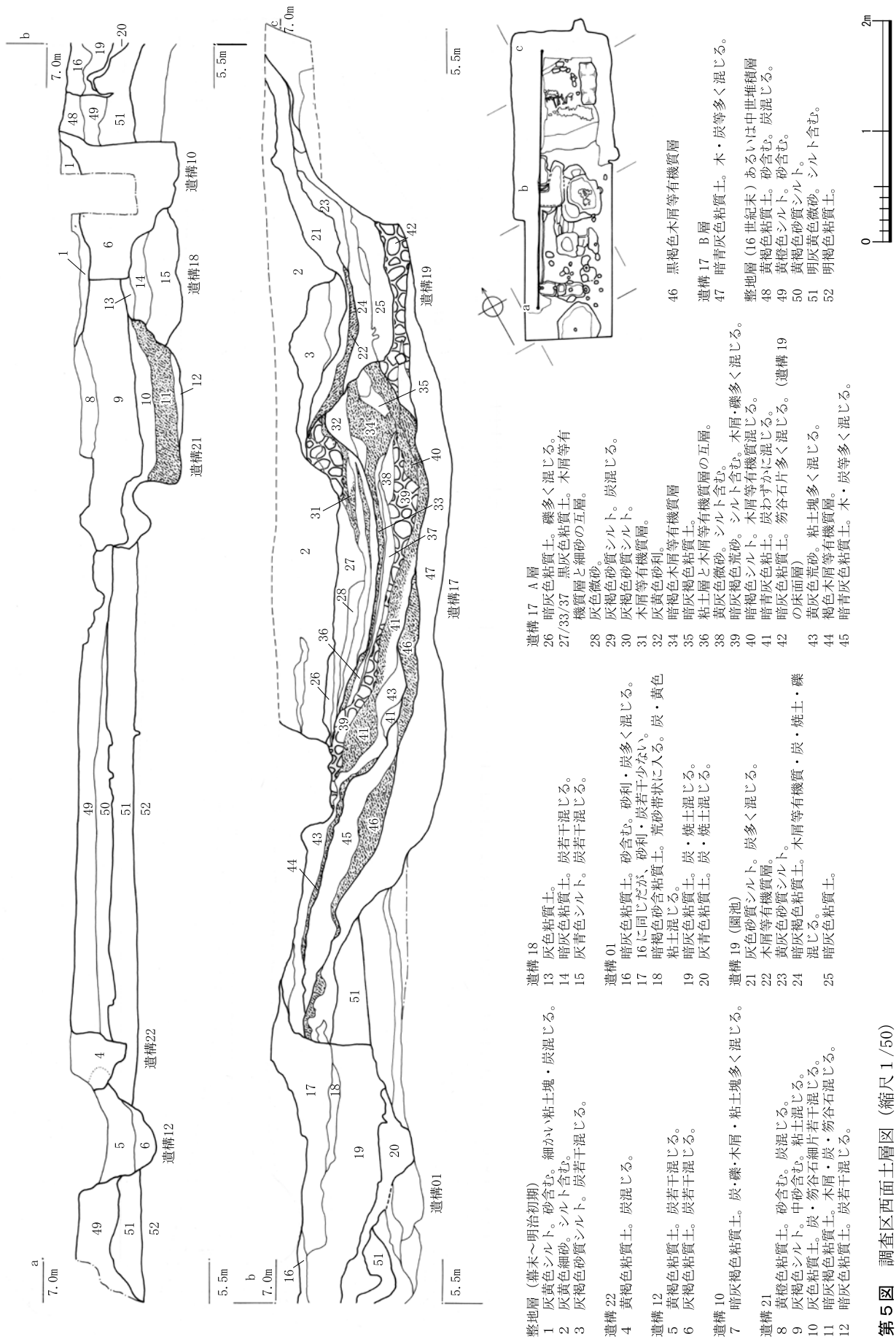
飛越地震の際の噴砂については「家譜」(松平文庫)および森恒救『福井藩史話』歴史図書社1975に記述がある。また、福井地震の際の噴砂については、『福井烈震誌』福井市1978に記述がある。

第1表 遺構観察表

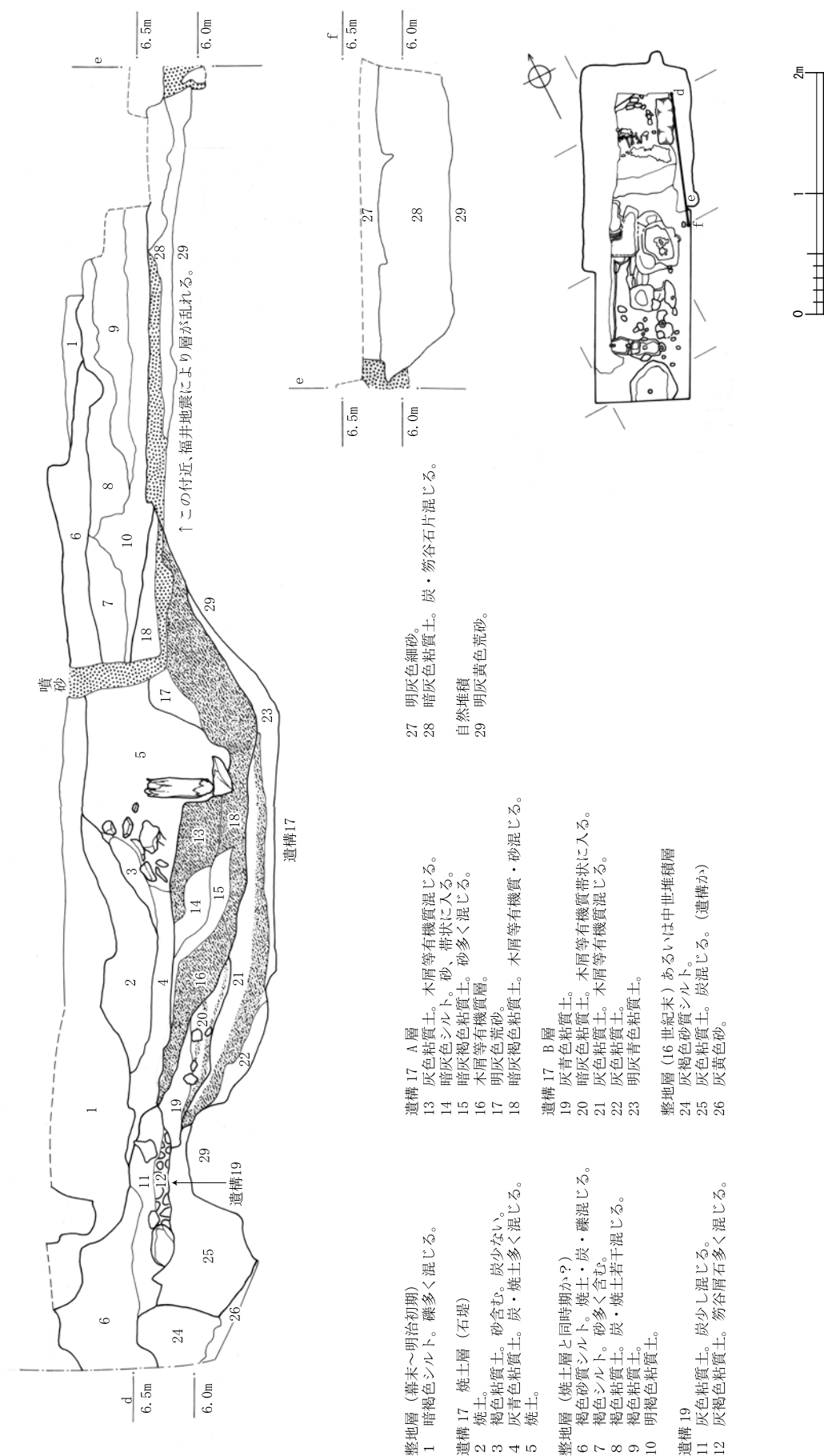
遺構番号	帰属面	グリッド	法量 (m)			種別	出土遺構の主な遺物の時期	備考	主な出土陶磁器の産地等	
			長辺	短辺	深さ					
01	Ⅲ	A-9	3	残0.95	0.74	土坑	17c後		伊万里、唐津	
02	Ⅳ	A〜J-9〜10	4.75	3.83	1.19	土坑	19c中		伊万里、京都・信楽、越前、土師質皿	
03	Ⅳ	A-10	1	残0.65	0.45	土坑	19c		17cの遺物多く混じる。	
04	I	I〜J-9	3.5	残3.3	1.1	土坑	16c末〜17c前	土師質皿は遺構底付近に集中、遺構15に切られる。	古瀬戸、土師質皿	
05	Ⅲ	J-9	0.4	0.38	0.42	ビット	17c中〜後		唐津、越前	
06	I	J-9	残0.5	0.3	0.17	ビット	16c末〜17c初		土師質皿	
07	Ⅱ	A-9	0.5	0.5	0.5	柱穴	17c初		唐津	
08	I	J-9	1.5	1	0.69	ビット	16c末〜17c初		土師質皿	
09	Ⅱ	J-9	0.7	0.68	0.6	柱穴	17c	礎石(笏谷石)あり。標高6.3m		
10	Ⅲ	A〜J-9	4.1	残2.2	0.9	土坑	17c後		伊万里、唐津、越前、土師質皿	
11	I	J-9	2.6	2.3	1.85	井戸	16c末〜17c初 底標高4.74m	井戸枠は抜き取られたか？	瀬戸美濃(大窯)、黄瀬戸、土師質皿	
12	I	J-9	残5.8	0.9	0.64	溝(屋敷境)	16c末〜17c前	遺構41と重なる。	土師質皿	
13	-	J-9	-	-	-	整地土	-		中国	
14	V	I〜J-9	残6.5	残4.0	-	土坑	近代	汽車土瓶廃棄土坑	汽車土瓶(近代)	
15	Ⅲ	I〜J-9	3.5	残3.3	1.1	土坑	17c中〜後	遺構04を切る(重なる)。	土師質皿	
16	Ⅲ	J-9	3.2	残1.7	0.88	土坑	17c初			
17		A-9〜10		8.6	1.22	落ち込み？	17c初〜後		唐津	
	焼土層	Ⅲ	残5.0	幅1.5	-	石堤(埋立層)	17c中〜後	A層を掘込み、焼土で埋め、礫を帯状に配する。遺構40のベース層。底標高5.97m	伊万里、唐津、伊賀、越前、瓦(赤瓦)	
	A層	Ⅱ		8.6	1.22	埋立層	17c初〜前	人工的に一気に埋め立てた層。底標高5.49m	中国、伊万里、唐津、信楽、越前、土師質皿	
	B層			J・A・B-9〜10	-	-	自然堆積？	16c末〜17c前	底標高5.16m	中国、土師質皿
18	Ⅱ	A-9	残1.72	残0.67	0.82	土坑	17c初		唐津、土師質皿	
19	Ⅲ	A〜B-10	残3.07	2.2	1.08	園地遺構	17c後	北側に石階段あり。笏谷石製立脚踏を転用。	伊万里、土師質皿。被災遺物含む。	
20	Ⅲ	A-9	1.8	0.8	0.36	土坑	17c	整地土？		
21	Ⅲ	A-9	3.3	0.8	0.81	土坑	17c後		唐津	
22	Ⅱ	J-9	0.7	0.6	0.26	柱穴	16c末〜17c前	礎石(笏谷石)あり。標高6.52m	土師質皿	
24	Ⅲ	A-9	-	-	-	土坑？	17c後	遺構01と10に切られる。	唐津	
25		I	A-10	掘方径3.64	石内径0.6	残2.0	井戸	16c末	笏谷石自然石積み。	瀬戸美濃、土師質皿
	上層			2.5	2.2	-	廃棄土坑？	17c初	遺構25の石材抜き取り後、埋め戻す。底標高4.66m	古瀬戸
27	Ⅱ	J-9	0.6	-	0.42	柱穴	-	礎石(笏谷石)あり。標高6.38m		
28	Ⅱ	J-9	0.6	-	0.38	柱穴	-	礎石(笏谷石)あり。標高6.28m		
29	Ⅱ	J-9	0.63	-	0.43	柱穴	-	礎石(笏谷石)あり。標高6.34m		
30	Ⅲ	A-10	0.62	-	0.55	柱穴	17c後	柱根、礎石(笏谷石)あり。標高6.34m		
31	Ⅲ	A-10	0.55	-	0.62	柱穴	17c後	柱根、礎石(笏谷石)あり。標高6.11m		
32	Ⅲ	A-10	0.6	-	0.88	柱穴	17c後	柱根、礎石(笏谷石)あり。標高6.04m		
33	Ⅲ	A-10	残3.3	-	0.78	柱穴	17c後	柱根、礎石(笏谷石)あり。標高5.87m		
40	Ⅲ	J-9	柱間1.40	-	-	柱列(木堀？)	17c後	柱穴30〜33		
41	Ⅱ	A-9〜10	柱間1.40	-	-	柱列(木堀？)	17c初〜前？	柱穴09、22、27、28、29		



第4図 時期別遺構配置図 (縮尺 1/200)

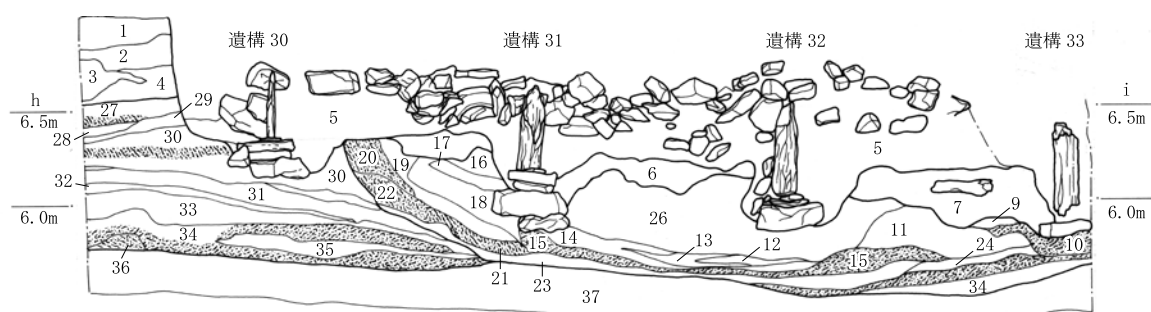


第5図 調査区西面土層図 (縮尺 1/50)



第6図 調査区東面土層図 (縮尺1/50)

第3章 遺構



整地層

- 1 黄灰色微砂。シルト含む。
- 2 褐色シルト。炭混じる。
- 3 黄灰色微砂。シルト含む。
- 4 暗褐色粘質土。炭・礫混じる（底に溜まる）。

遺構 17 焼土層（石堤）

- 5 暗灰褐色粘質土。砂含む。炭・焼土多く混じる。
- 6 灰色粘質土。炭・焼土混じる。
- 7 暗灰色粘質土。炭・焼土混じる。

遺構 17 A 層

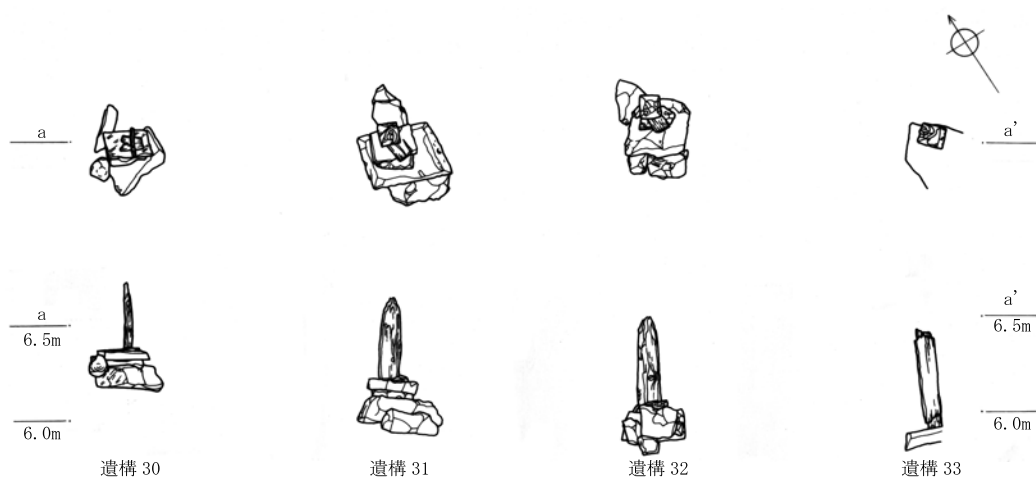
- 8 暗灰色粘土。木屑等有機質混じる（松笠多い）。
- 9 灰褐色シルト。
- 10 暗灰褐色粘質土。木屑等有機質多く混じる。
- 11 暗灰色荒砂。シルト含む。
- 12 暗灰黄色微砂。
- 13 暗灰色粘土。木屑等有機質混じる（松笠多い）。
- 14 木屑等有機質層。
- 15 暗灰色粘土。木屑等有機質混じる（松笠多い）。
- 16 灰色シルト。荒砂多く含む。
- 17 暗灰色シルト。荒砂多く含む。
- 18 灰色荒砂。
- 19 暗灰色粘質土。木屑等有機質混じる。
- 20 暗褐色粘質土。砂多く含む。木屑等有機質混じる。
- 21 明黄灰色荒砂。木屑等有機質混じる。
- 22 木屑等有機質層。

- 23 暗灰色粘質土。微砂多く含む。
- 24 暗灰色細砂。
- 25 暗灰褐色粘質土。木屑等有機質多く混じる。
- 26 灰褐色粘質土。
- 27 暗灰色粘質土。砂含む。木屑等有機質層帯状に入る。
- 28 明黄灰色細砂。粘質土含む。
- 29 明黄灰色細砂。
- 30 暗灰色粘質土。木屑等有機質多く混じる。
- 31 暗灰色粘質土。木屑等有機質多く混じる。
- 32 暗灰色荒砂。礫混じる。
- 33 暗灰色粘質土。砂含む。
- 34 暗灰褐色木屑等有機質層。
- 35 灰色粘土。
- 36 灰色粘土。

遺構 17 B 層

- 37 灰色粘土。木屑等有機質含む。

(1) 調査区東西土層図

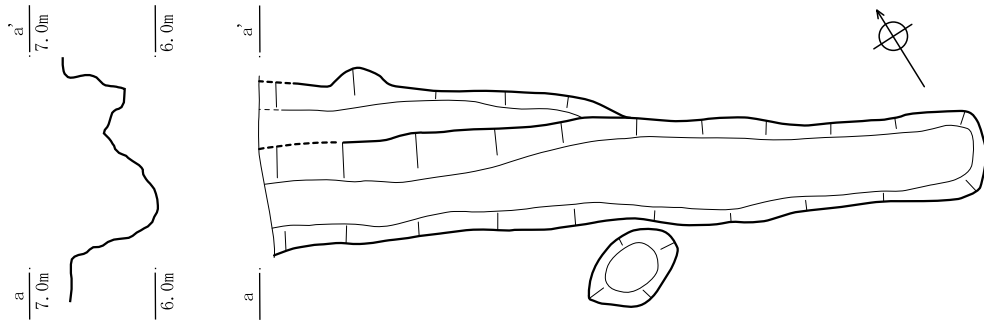


(2) 遺構40平・立面図(遺構30～33)

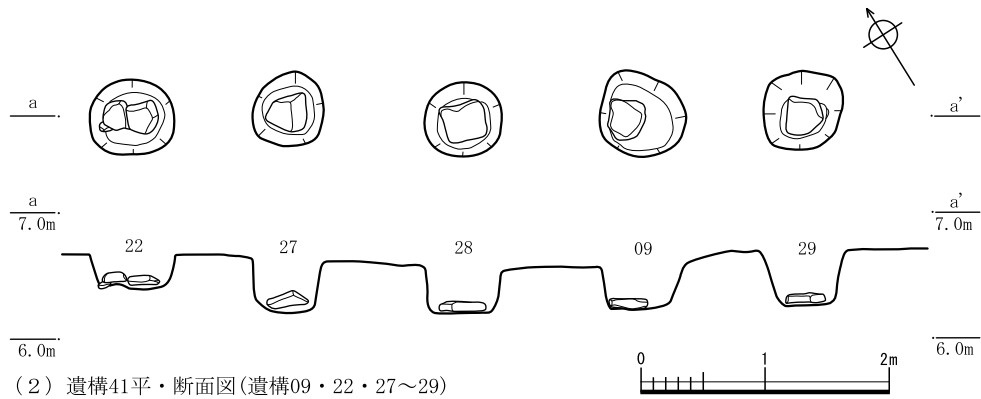


第7図 調査区東西土層図および遺構 40 立・平面図（縮尺 1/40）

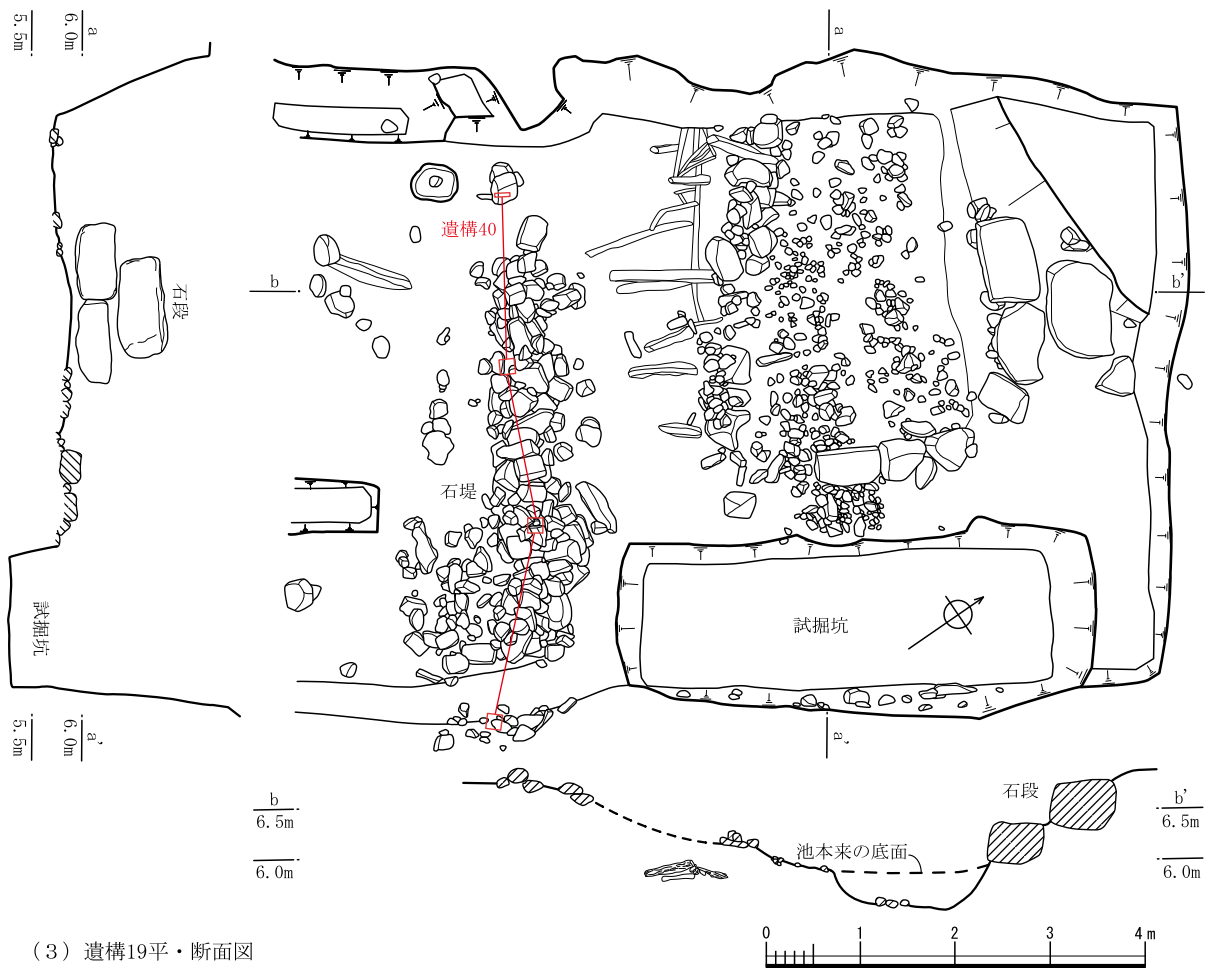
第2節 遺構各説



(1) 遺構12平・断面図

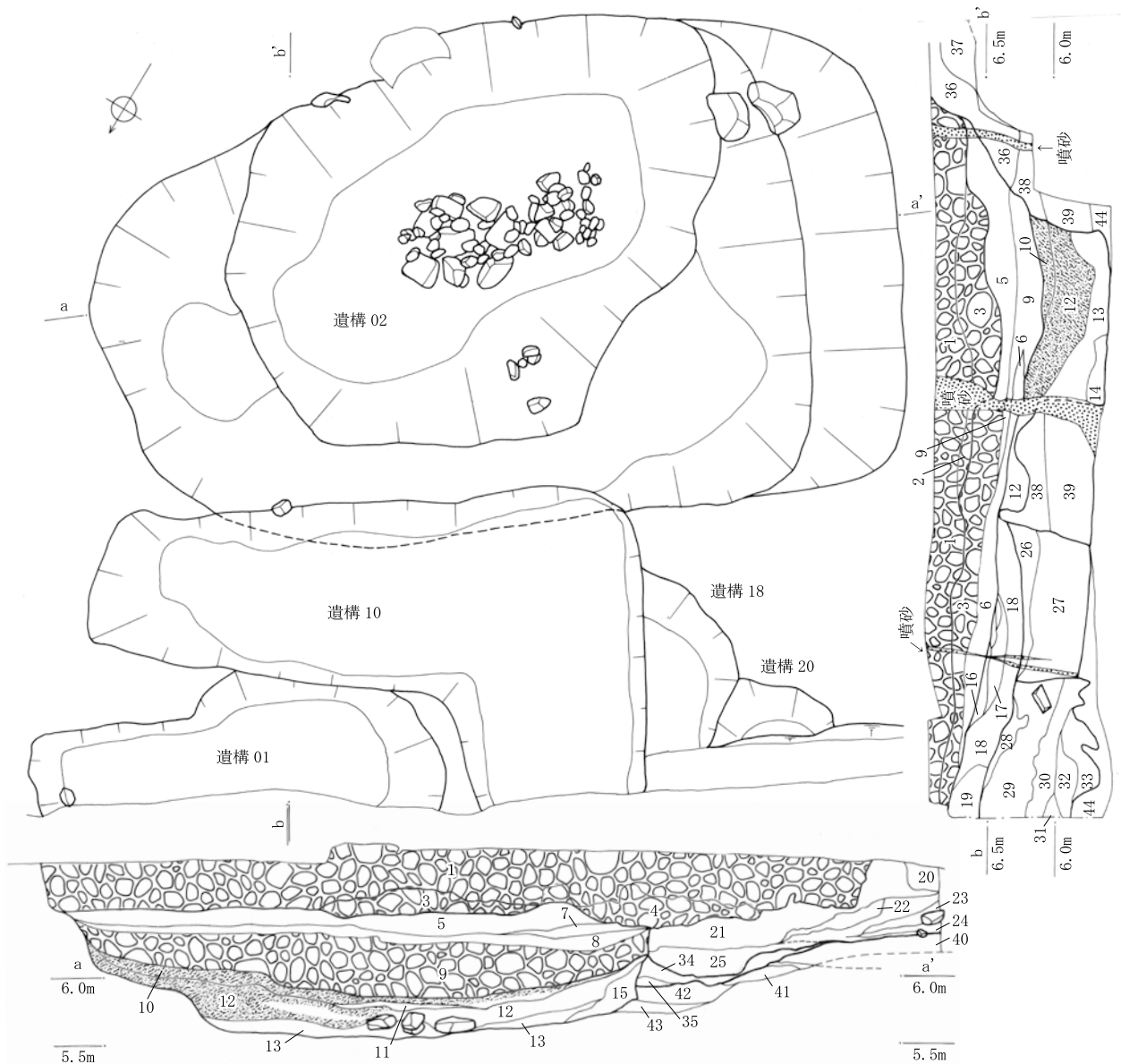


(2) 遺構41平・断面図(遺構09・22・27～29)



(3) 遺構19平・断面図

第8図 遺構12・19・41平・断面図(縮尺1/60、3は1/80)



遺構 02 上層

- 1 暗褐色砂質シルト。礫・炭多く混じる。
- 2 黒褐色炭化物層。
- 3 暗灰色粘質土。砂含む。炭・礫多く混じる。
- 4 暗褐色砂質シルト。礫少し混じる。炭・焼土多く混じる。
- 5 暗灰色粘質土。礫少し混じる。炭混じる。
- 6 暗灰色シルト。砂含む。
- 7 暗灰色細砂シルト。粘質土層帯状に入る。
- 8 暗灰色砂質シルト。礫・炭混じる。
- 9 暗青灰色粘質土。粘土塊・礫少し混じる

遺構 02 下層

- 10 褐色シルト。木屑等有機質層・シルトの互層。
- 11 灰色粘質土。
- 12 灰褐色砂質シルト。砂・木屑等有機質層・粘土の互層
- 13 青灰色砂質シルト。砂・シルトの互層。礫少し混じる。
- 14 灰褐色粘質土。
- 15 暗灰色粘質土。

整地層

- 16 暗灰褐色砂質シルト。炭・焼土混じる。
- 17 暗灰黄色砂質シルト。炭・焼土混じる。
- 18 黒褐色砂質シルト。木屑等有機質多く混じる。
- 19 灰褐色シルト質中砂。
- 20 褐色砂質シルト。炭・焼土多く混じる。
- 21 灰褐色中砂。シルト・粘土塊混じる。炭若干混じる。
- 22 明褐色粘質土。マンガン粒多く出る。
- 23 灰褐色砂質シルト。炭・焼土多く混じる。
- 24 暗灰褐色砂質シルト。炭・焼土多く混じる。
- 25 灰褐色粘質土。砂含む。炭若干混じる。

遺構 10

- 26 暗青灰色粘質土。砂含む。
- 27 黒褐色砂質シルト。粘土塊多く混じる。木屑等有機質が帯状に互層となる。

遺構 01

- 28 灰黄色シルト質荒砂。
- 29 黒灰色粘質土。炭・木屑等混じる
- 30 黄灰色シルト質細砂。粘土塊多く混じる。

- 31 灰色砂質シルト。
- 32 暗灰色粘質土。炭混じる。
- 33 暗灰色粘質土。

遺構 16

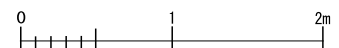
- 34 灰色粘質土。炭・焼土混じる。
- 35 明灰色粘質土。

整地層 (16世紀末～17世紀初期)

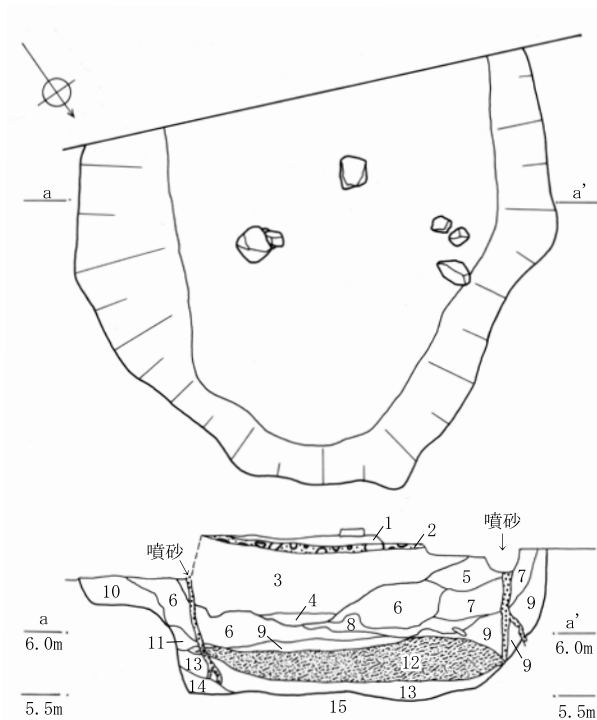
- 36 暗灰褐色粘質土。
- 37 灰褐色粘質土。炭・焼土混じる。
- 38 白灰色細砂。
- 39 灰色シルト。
- 40 明褐色砂質シルト。炭若干混じる。
- 41 黄褐色細砂シルト。
- 42 灰色粘質土。砂含む。
- 43 灰色中砂。シルト含む。

自然堆積層

- 44 白黄色中砂。粘土塊少し混じる。



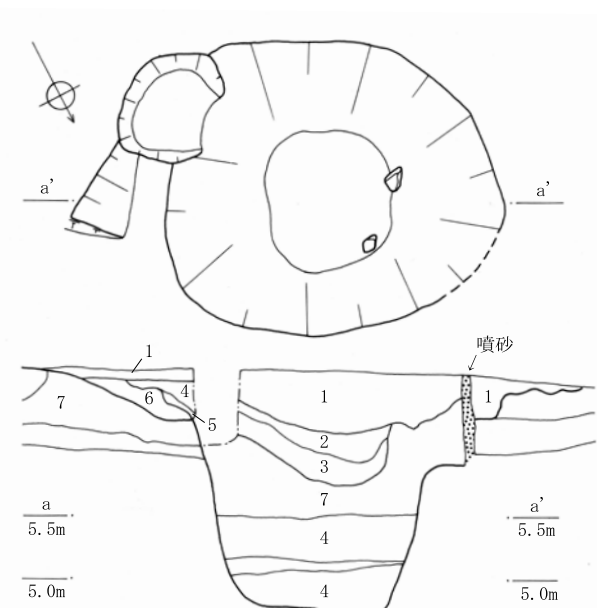
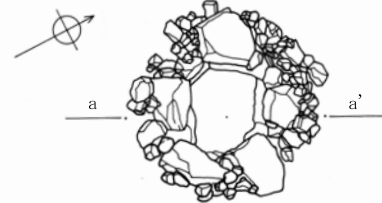
第9図 遺構 01・02・10 平・断面図 (縮尺 1/50)



(1) 遺構 04 平・断面図

遺構 04

- 1 黄灰色中砂。白黄色粘土塊混じる。
- 2 笏谷屑石層。厚さ1cm程度。
- 3 暗褐色シルト。炭・焼土・礫多く混じる。
- 4 暗褐色粘質土。炭・焼土多く混じる。
- 5 灰褐色シルト。砂含む。炭・細かい黄色粘土塊混じる。
- 6 暗灰褐色粘質土。炭・焼土・黄色粘土塊混じる。
- 7 灰褐色粘質土。砂含む。炭多く混じる。細かい黄色粘土塊混じる。
- 8 黄灰色粘質土。砂含む。黄色粘土塊混じる。炭多く混じる。
- 9 暗灰色粘質土。砂含む。
- 10 灰褐色粘質土。微砂含む。縮まり悪い。炭若干混じる。
- 11 明灰褐色粘質土。炭ほとんど混じらず。
- 12 暗黒褐色木屑等有機質層。灰色シルト層縞状に入る。
- 13 灰青色粘質土。炭若干混じる。
- 14 灰色微砂。シルト含む。
- 15 明黄灰色荒砂。(地山)



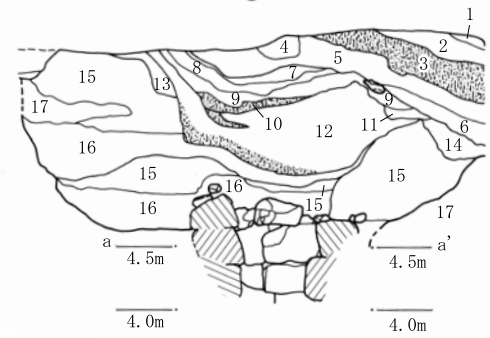
遺構 11

- 1 暗褐色砂質シルト。炭・焼土混じる。
- 2 暗褐色砂質シルト。黄色粘土塊・炭・焼土混じる。
- 3 暗灰褐色砂質シルト。砂気強い。炭混じる。
- 4 暗灰褐色粘質土。黄色粘土塊・炭多く混じる。
- 5 褐色砂質シルト。黄色粘土塊多く混じる。
- 6 褐色砂質シルト。炭若干混じる。

整地層

- 7 明褐色砂質シルト。

(2) 遺構 11 平・断面図



遺構 17

- 1 径1～2cmの砂利層。
- 2 灰色粘質土。(A層)
- 3 暗灰色シルト。砂・木屑等有機質多く混じる。(A層)
- 4 青灰色粘質土。
- 5 灰色シルト。砂含む。炭多く混じる。(B層)
- 6 灰色シルト。砂・炭混じる。

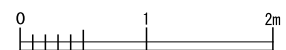
遺構 25 埋土A (遺構 17 と同時期か)

- 7 黄灰色砂質土。シルト含む。
- 8 灰色シルト。炭若干混じる。
- 9 黄白灰色細砂シルト。粘土塊混じる
- 10 褐色木屑等有機質層。
- 11 暗青灰色微砂シルト。中砂層帯状に入る。
- 12 暗灰黄色粘質土。微砂含む。底部に木屑等有機質層。

遺構 25 埋土B

- 13 灰黄色中砂。粘土塊混じる。
- 14 灰色中砂。
- 15 灰褐色中砂。灰色粘土塊混じる。
- 16 暗灰色シルト。砂少し含む。笏谷石片多く混じる。
- 17 黄灰色荒砂。(地山)

(3) 遺構 25 平・断面図



第10図 遺構 04・11・25 平・断面図 (縮尺 1/60)

第4章 遺物

第1節 土器・陶磁器

遺構02・17・焼土層から出土したものが多く、これらで出土総数の三分の二以上を占める。そのうち、遺構出土のものを中心に134点を図化した。以下では、とくに遺物量の多い上記遺構と、中世末の遺物を含む遺構11出土の資料について解説を加える。

1 遺構02出土資料(第11・12図)

伊万里焼・唐津焼・京焼・信楽焼・越前焼・土師質土器などが出土している。とくに越前焼と土師質土器の量が多い。19世紀前葉から中葉のものが中心を占める。見込みに五花弁文を持つ伊万里焼の筒碗(02-1)・丸碗(02-2)は、若干古手で18世紀後葉～19世紀前葉のものである。伊万里焼の端反碗(02-7)は「素描」の文様を持つ。伊万里焼の色絵碗(02-3)は口縁と見込みに釉剥ぎがある。瀬戸系とした蓋(02-8)は、瀬戸焼磁器の可能性が高いが、九谷焼など他の産地の可能性も残っている。京焼の碗(02-5)は山水の鉄絵を描き、腰に段を作り出し、高台脇を露胎とし櫛描き文様を持つ。唐津焼の播鉢(02-10)は、越前焼の播鉢が多数を占める福井城跡でも一定量出土する。越前焼は鉢・瓶・甕・播鉢など(02-13～16・25)が出土している。19世紀前葉から中葉のものである。土師質土器皿・灯明受皿(02-18～24・26～30)は、すべて型作りのものである。

2 遺構11出土資料(第13図)

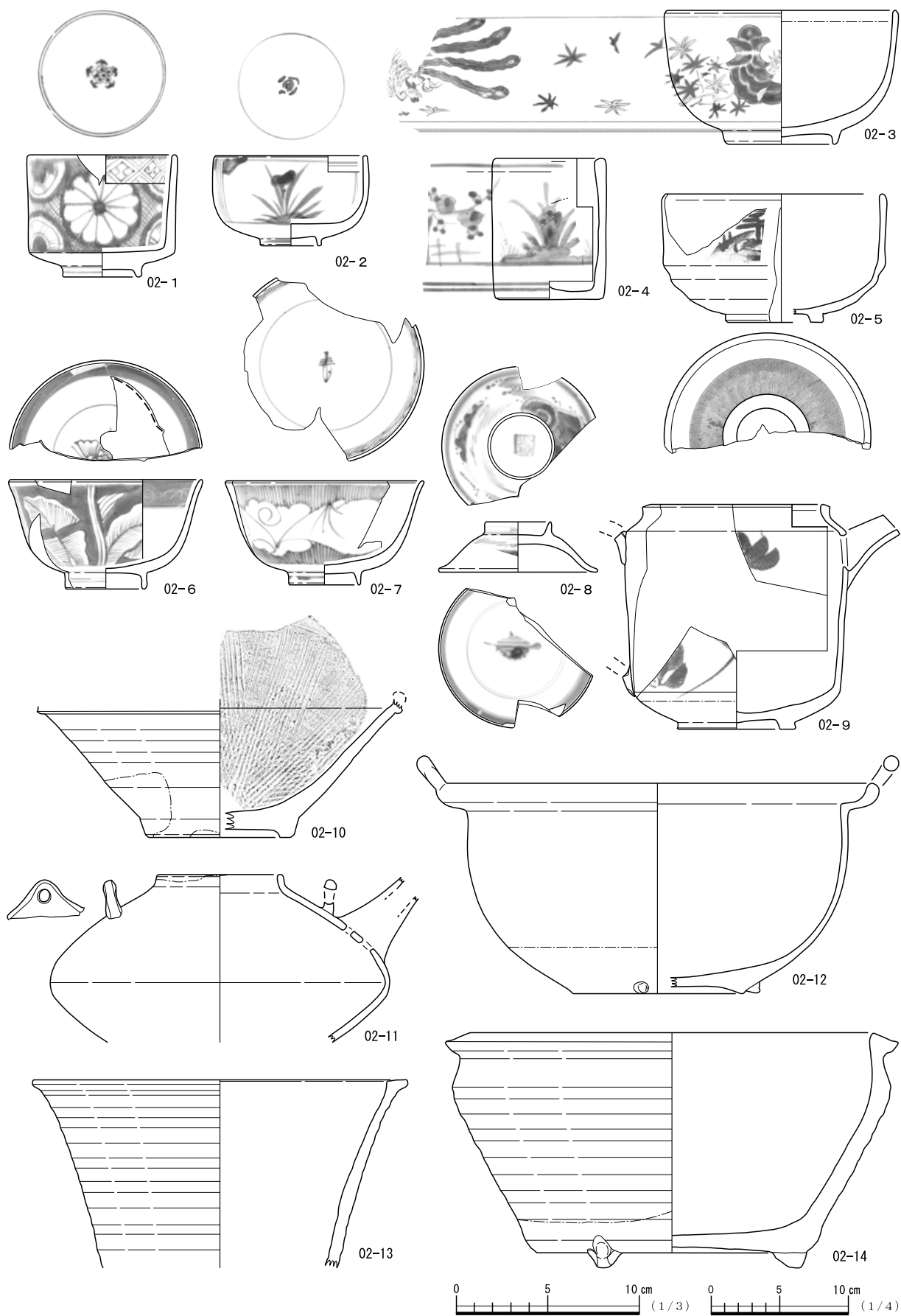
瀬戸美濃焼・越前焼・土師質土器などが出土している。16世紀末から17世紀初めの遺物が多い。瀬戸美濃焼の稜花鉢(黄瀬戸・11-1)と天目茶碗(11-2)は大窯期のものである。越前焼の甕(11-3)は、15世紀後半のものである。越前焼の播鉢(11-4)は口縁下に沈線を持ち、播り目の摩耗が激しい。土師質土器皿(11-5～14)は、外面にナデによる段を持つものが多い。

3 遺構17出土資料(第14・15図)

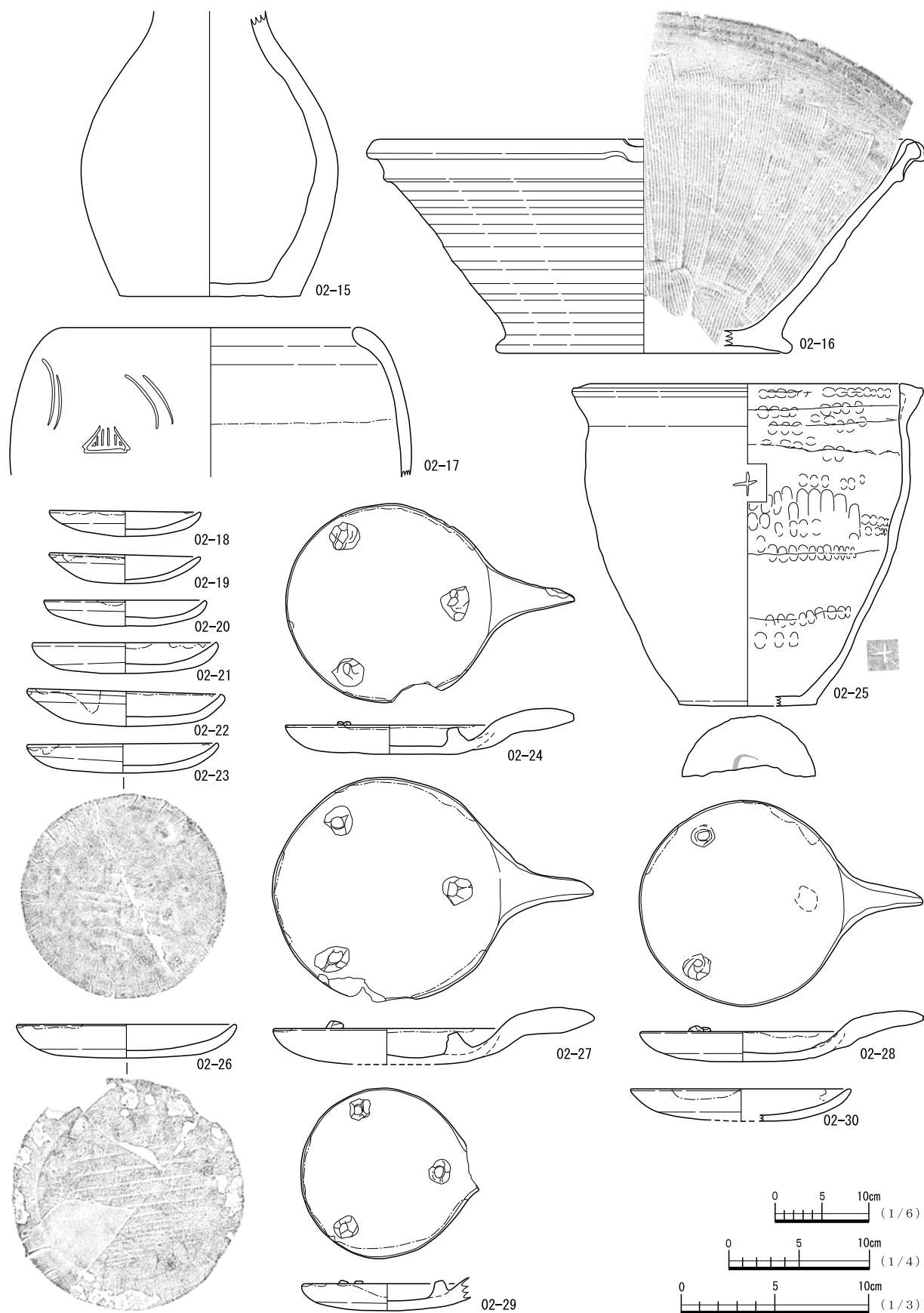
中国陶磁器、伊万里焼、唐津焼、信楽焼、越前焼、土師質皿など多くの遺物が出土している。16世紀末から17世紀前半のものが中心である。白磁小坏(17A-2)と、器壁に縦筋彫りのある「福壽」字碗(17A-5)は初期伊万里の製品である。中国陶磁器には、景德鎮窯(17A-4・17B-10)と漳州窯(17A-6・7)の製品が見られる。唐津焼の折縁皿(17A-3)は胎土目が残ри、竹の節高台を持つ片口(17A-8)とともに若干古手の遺物である。信楽焼の四耳壺(17A-13)は、上半部に鉄釉と灰釉が掛かる。越前焼の播鉢(17A-11・12)には、口縁端面が斜めになり、その脇に沈線が巡る16世紀末のものと、口縁端面が水平に近づき、沈線を持たない17世紀前半のものがある。焼塩壺(17A-31)は、刻印から泉州堺に隣接する湊村の焼塩を入れたものと分かる。

4 焼土層出土資料(第15・16図)

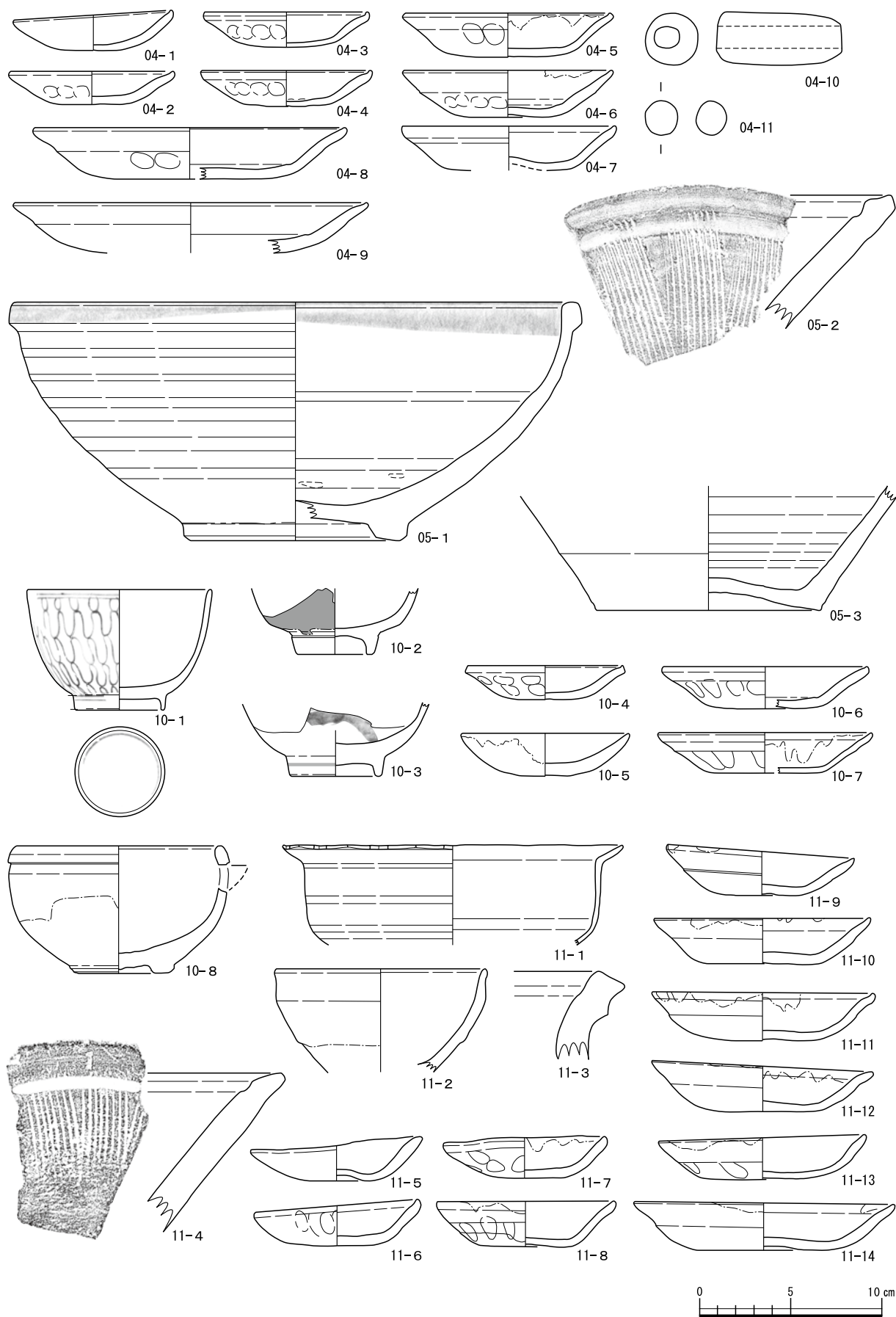
伊万里焼・唐津焼・伊賀焼・越前焼・土師質皿などが出土している。遺物は17世紀中～後葉のものが中心で、寛文9年(1669)の大火の瓦礫を埋めものと考えられる。伊万里焼の青磁大皿(焼-2)は、見込みに花文・雷文をへう彫りし、高台内を蛇の目釉剥ぎして鉄塗りを行っている。伊万里焼の色絵油壺(焼-3)は、上絵がほとんど剥落し、赤絵がわずかに残るのみである。伊万里焼の稜花皿(焼-5)は薄作りで、口縁に口紅を施し高台部を露胎とする。唐津焼の瓶(焼-6)は碁笥底で、体部外面の下部と内面には鉄釉を掛け、それ以外の体部外面には白化粧土を塗った上に、緑釉を掛けている。高台部は露胎である。伊賀焼の水指(焼-14・15)は、へう彫りで装飾を施し、口縁部や体部下半に自然釉が掛かる。



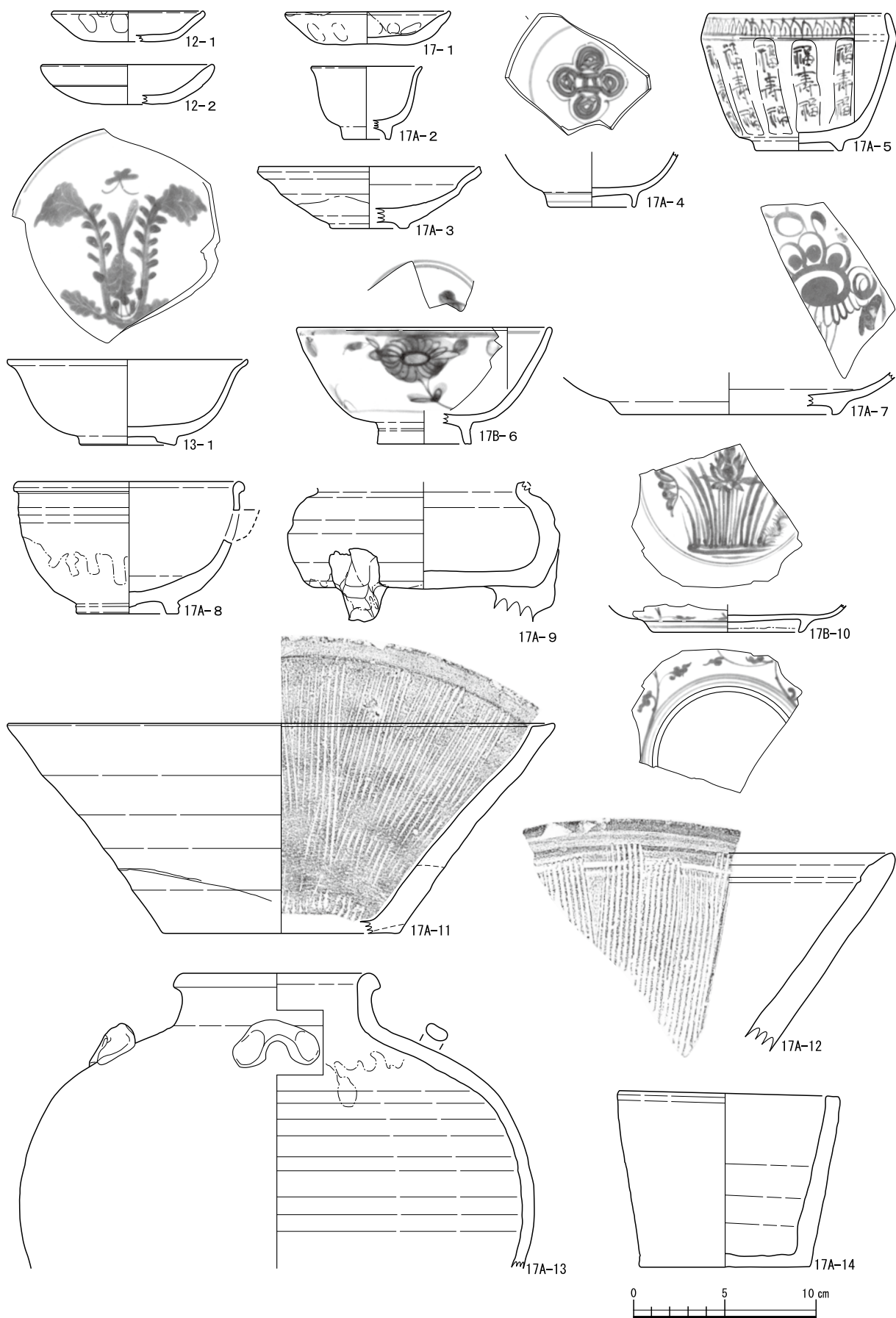
第11図 土器・陶磁器実測図(遺構02①) (縮尺 1/3、02-13 : 1/4)



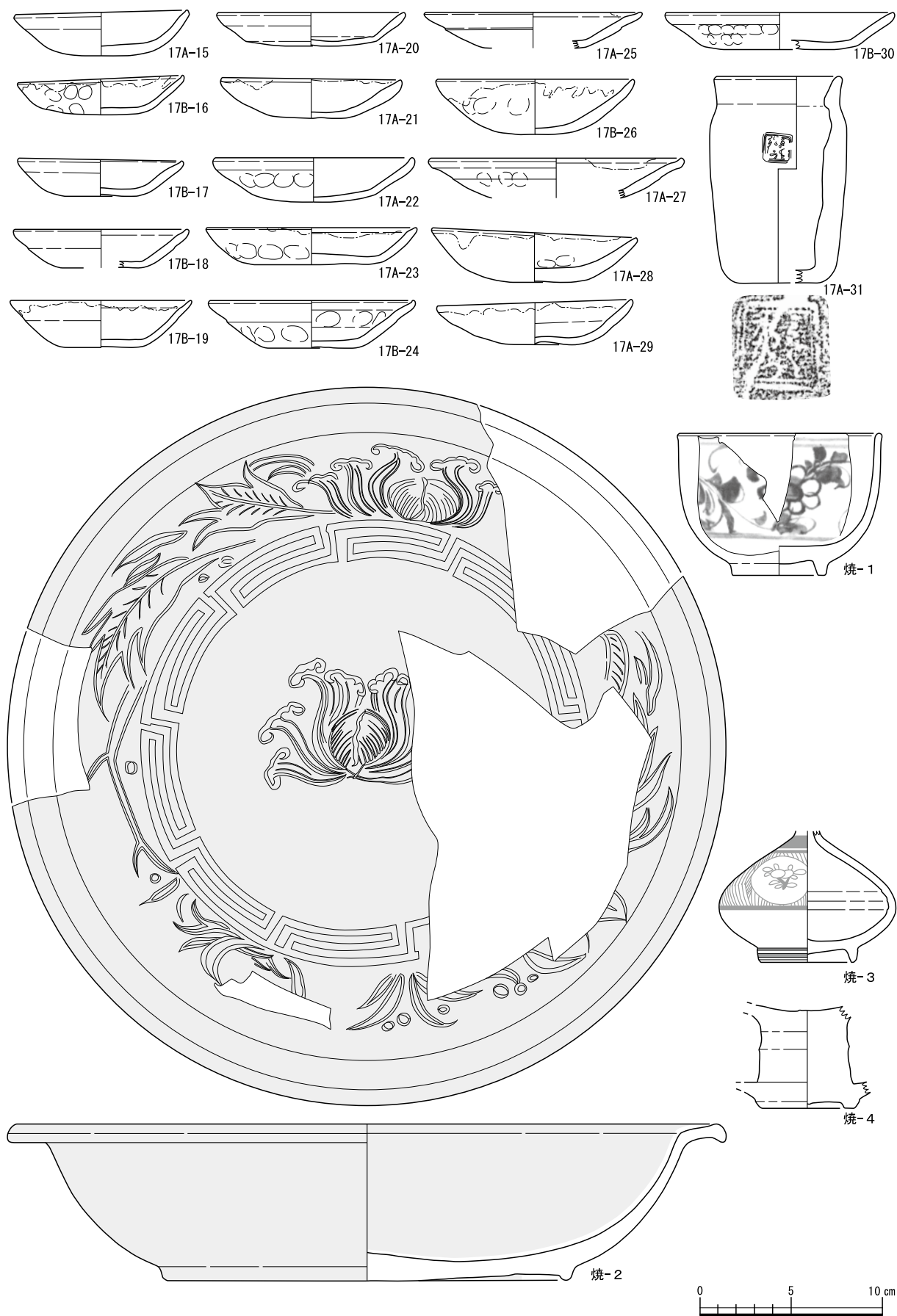
第12図 土器・陶磁器実測図(遺構02②)(縮尺1/3、02-16:1/4、02-25:1/6)



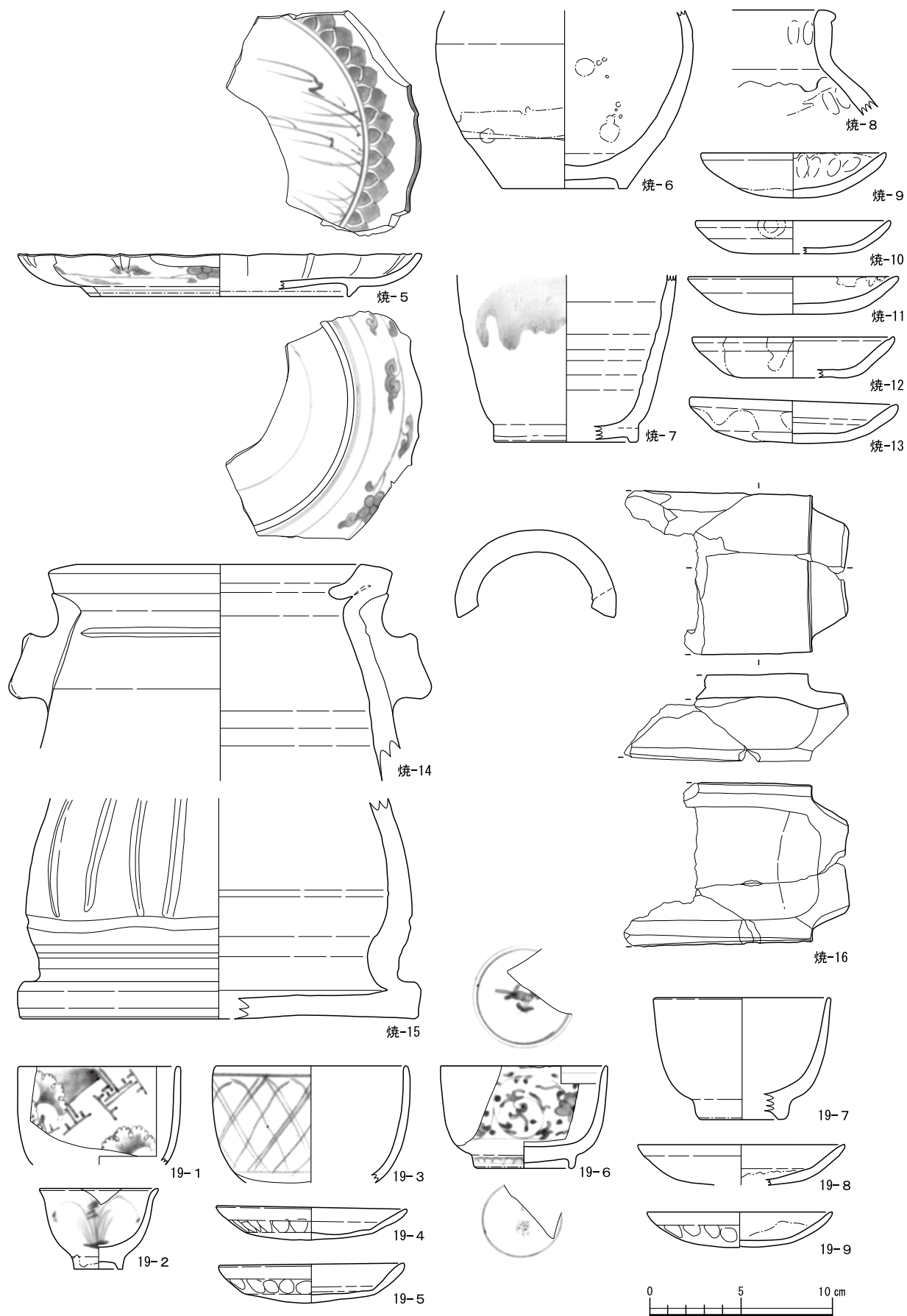
第13図 土器・陶磁器実測図(遺構04・05・10・11)(縮尺1/3)



第14図 土器・陶磁器実測図(遺構12・13・17①)(縮尺1/3)

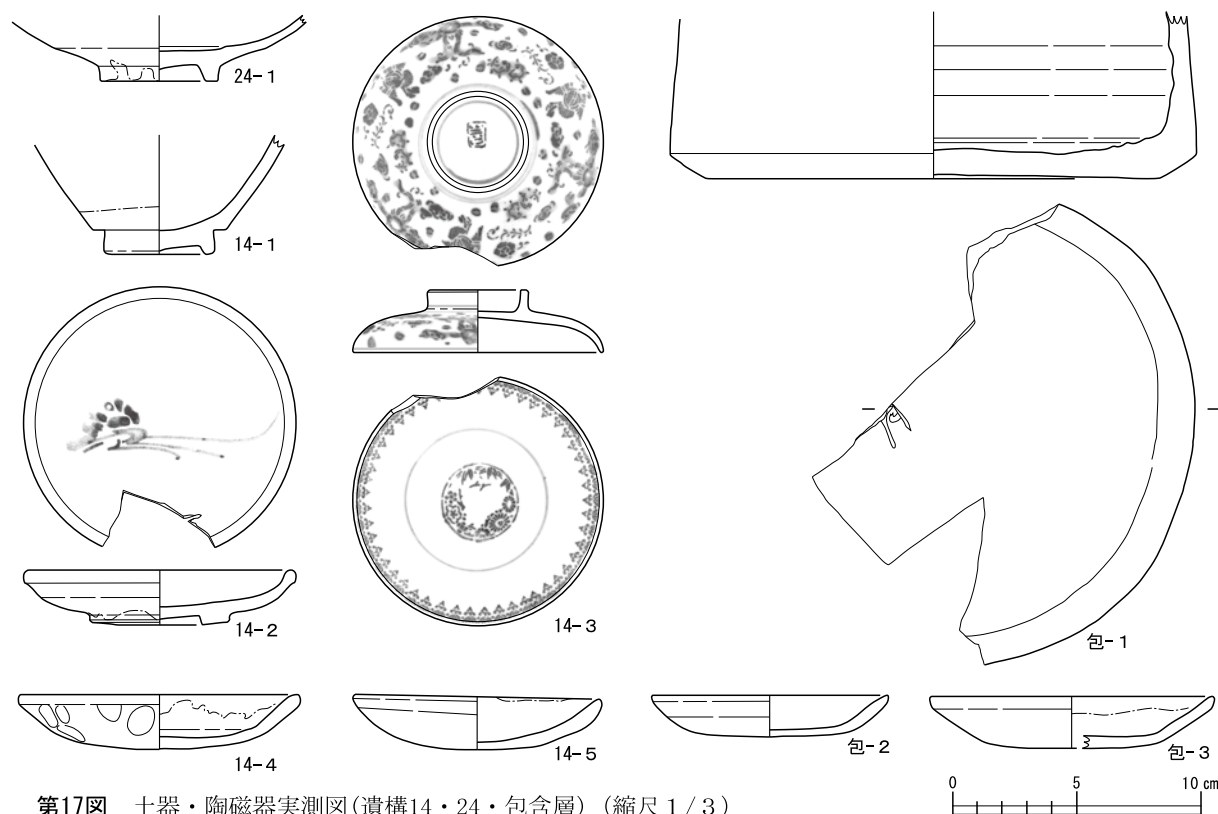


第15図 土器・陶磁器実測図(遺構17②・焼土層①)(縮尺1/3)



第16図 土器・陶磁器実測図(焼土層②・遺構19)(縮尺1/3)

第1節 土器・陶磁器



第17図 土器・陶磁器実測図(遺構14・24・包含層)(縮尺1/3)

第2表 土器・陶磁器観察表

挿図番号	図版番号	遺構・層位	器種	土師質:灯芯油痕 陶磁器:産地	法量 (cm)			土師質:胎土・色調 陶磁器:釉薬・装飾	成形・調整・その他	実測No.
					口径	底径	高さ			
11-02-1	7	02	碗	伊万里	8.05	4.30	6.60	染付	—	S・015
11-02-2	7	02	碗	伊万里	8.4	3.4	4.85	染付	—	S・013
11-02-3	7	02	碗	伊万里	12.6	6.45	7.2	染付、上絵(赤・緑)	見)釉はぎ	S・012
11-02-4	7	02	灰吹	伊万里	6.2	5.8	7.6	染付	—	S・016
11-02-5	7	02	碗	京都	11.4	4.6	6.9	灰釉、鉄絵	見)目跡1つ、外)腰部無釉、櫛描文	S・024
11-02-6	7	02	碗	伊万里	10.4	4.4	5.9	染付	漆継ぎ	S・011
11-02-7	7	02	碗	伊万里	10.75	4.0	5.6	染付	—	S・010
11-02-8	7	02	蓋	瀬戸系	—	8.55	2.70	染付	—	S・014
11-02-9	7	02	水注	京都	10.1	6.4	12.1	透明釉、鉄絵、白泥	—	S・017
11-02-10	7	02	搗鉢	唐津	—	8.1	残7.05	錆釉	—	S・023
11-02-11	7	02	土瓶	京都(信楽)	6.9	—	残10.5	灰釉	遺構01と接合	S・018
11-02-12	7	02	土鍋	京都(信楽)	23.0	9.2	11.35	灰釉	三足、見)目跡4つ	S・028
11-02-13	7	02	鉢	越前	27.0	—	残13.5	鉄泥	—	S・025
11-02-14	7	02	鉢	越前	24.4	15.8	12.6	鉄泥	三足	S・022
12-02-15	7	02	瓶	越前	—	9.6	残15.0	鉄泥	内)油粕付着	S・027
12-02-16	7	02	搗鉢	越前	39.0	20.8	15.0	—	高台付き、内)搗目13本単位	S・030
12-02-17	7	02	火鉢	—	15.2	—	残7.9	淡灰褐色	内)スス付き、外)刻印・刻文	S・026
12-02-18		02	土師質皿	あり	8.0	—	1.85	淡灰褐色	G系	S・001
12-02-19		02	土師質皿	あり	8.0	—	2.0	淡灰褐色	G系	S・002
12-02-20	10	02	土師質皿	あり	8.6	—	1.9	淡灰褐色	G系	S・003
12-02-21		02	土師質皿	あり	9.8	—	1.65	淡灰褐色	G系	S・020
12-02-22		02	土師質皿	あり	5.4	—	2.0	淡灰褐色	G系	S・019
12-02-23		02	土師質皿	あり	10.1	—	1.55	淡灰褐色	G系	S・004
12-02-24	10	02	灯明受皿	あり	15.2	—	1.4	淡灰褐色	G系	S・006
12-02-25	7	02	甕	越前	37.0	14.2	34.0	鉄泥	外)刻文、底)墨書	S・029
12-02-26		02	土師質皿	あり	11.8	—	1.75	淡灰褐色	G系	S・021
12-02-27		02	灯明受皿	あり	8.95	—	1.4	淡灰褐色	G系	S・007
12-02-28		02	灯明受皿	あり	14.9	—	2.1	淡灰褐色	G系	S・008
12-02-29		02	灯明受皿	あり	16.9	—	1.9	淡灰褐色	G系	S・009
12-02-30		02	土師質皿	あり	11.6	—	1.7	淡灰褐色	G系	S・005
13-04-1		04	土師質皿	なし	8.7	—	2.2	淡灰褐色	Cd系、口)つまみ上げ	Q・003
13-04-2	10	04	土師質皿	なし	9.0	—	1.8	淡灰褐色	Cd系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Q・007
13-04-3		04	土師質皿	なし	9.0	—	1.9	淡灰褐色	C系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Q・009
13-04-4		04	土師質皿	なし	9.3	—	1.95	淡灰褐色	C系、外・見)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Q・010
13-04-5		04	土師質皿	あり	11.4	—	2.3	淡灰褐色	D系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Q・002
13-04-6		04	土師質皿	あり	11.4	—	2.5	淡灰褐色	D系、外)指頭圧痕	Q・006
13-04-7		04	土師質皿	なし	11.6	—	残2.4	淡灰褐色	D系、内・外)黒く焼けた跡あり	Q・001
13-04-8		04	土師質皿	なし	17.0	—	2.8	淡褐色	D系、内)黒く焼けた跡あり、外)指頭圧痕、遺構10と接合	Q・005
13-04-9		04	土師質皿	なし	19.2	—	2.7	淡褐色	D系、内)黒く焼けた跡あり、遺構10と接合	Q・004
13-04-10	7	04	土鍾	—	長さ6.7	幅2.95	2.9	淡灰褐色	—	Q・008
13-04-11		04	土鈴の玉?	—	最大径1.85	幅1.70	1.65	淡灰褐色	—	Q・011
13-05-1	7	05	鉢	唐津	31.0	12.2	12.9	灰釉、鉄釉で口紅	見)胎土目4つ	Q・014
13-05-2	7	05	搗鉢	越前	—	—	残7.2	—	内)搗目10本単位	Q・012
13-05-3	7	05	壺	越前	—	12.1	残6.7	—	—	Q・013
13-10-1	8	10	碗	伊万里	10.0	4.9	6.5	染付	—	G・007
13-10-2	8	10	碗	伊万里	—	4.0	残3.55	外)鉄釉、内)透明釉	—	G・002

第4章 遺物

挿図番号	図版番号	遺構・層位	器種	土師質：灯芯油痕 陶磁器：産地	法量 (cm)			土師質：胎土・色調 陶磁器：釉薬・装飾	成形・調整・その他	実測No.
					口径	底径	高さ			
13-10-3	8	10	碗	伊万里	—	5.0	残4.0	染付	—	G・001
13-10-4		10	土師質皿	なし	8.6	—	1.85	淡橙色	C系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ、内・外)油脂付着	G・005
13-10-5	10	10	土師質皿	あり	9.2	—	2.3	淡灰褐色	B系、内・外)油脂付着	G・006
13-10-6		10	土師質皿	なし	11.2	—	2.3	赤褐色	D系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	G・004
13-10-7		10	土師質皿	あり	11.6	—	2.2	淡褐色	D系、外)指頭圧痕	G・003
13-10-8	8	10	片口	唐津	12.0	5.6	6.9	鉄釉	—	G・008
13-11-1	8	11	鉢	美濃	18.4	—	残5.4	黄瀬戸釉	—	Z・011
13-11-2	8	11	天目茶碗	瀬戸美濃	11.3	—	残5.6	鉄釉	大窯期	Z・014
13-11-3		11	甕	越前	—	—	残4.8	—	—	Z・012
13-11-4	8	11	描鉢	越前	—	—	—	—	内)描目8本単位、描目摩耗激しい	Z・013
13-11-5	10	11	土師質皿	なし	9.3	—	2.4	淡褐色	C系、へそ皿	Z・009
13-11-6		11	土師質皿	なし	8.9	—	2.5	鈍い褐色	C系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Z・010
13-11-7		11	土師質皿	あり	8.9	—	2.2	浅黄色	C系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Z・008
13-11-8		11	土師質皿	あり	9.7	—	2.5	浅黄色	D系、内)布状圧痕、外)指頭圧痕	Z・006
13-11-9		11	土師質皿	あり	10.1	—	2.8	浅黄色	D系	Z・007
13-11-10		11	土師質皿	あり	11.6	—	2.5	浅黄褐色	Dc系	Z・002
13-11-11	10	11	土師質皿	あり	12.0	—	2.6	浅黄褐色	Dc系、口)つまみ上げ	Z・003
13-11-12		11	土師質皿	あり	12.0	—	2.7	浅黄褐色	Dc系	Z・004
13-11-13		11	土師質皿	あり	11.2	—	2.2	浅黄色	Dc系、外)指頭圧痕	Z・005
13-11-14		11	土師質皿	あり	14.1	—	2.65	浅黄褐色	Dc系、口)つまみ上げ、遺構04と接合	Z・001
14-12-1		12	土師質皿	あり	8.3	—	1.65	褐色	Cd系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	G・010
14-12-2		12	土師質皿	なし	9.4	—	2.15	淡褐色	Cd系	G・009
14-13-1	8	13	皿	中国(景德鎮)	13.0	5.2	4.6	染付	—	G・011
17-14-1	9	14	天目茶碗	瀬戸	—	4.3	残4.75	鉄釉	—	G・013
17-14-2	9	14	皿	京都・信楽	10.8	5.6	2.2	透明釉、鉄絵	見)目跡3つ、遺構02と接合	G・014
17-14-3	9	14	蓋	—	9.9	摘み径4.0	2.5	染付(型紙絵付)	—	G・012
17-14-4		14	土師質皿	あり	11.2	—	2.2	淡灰褐色	Dc系、外)指頭圧痕、口)油脂付着、底)薬状痕	G・015
17-14-5		14	土師質皿	あり	9.9	—	2.2	淡灰褐色	C系	G・016
14-17-1	10	17	土師質皿	あり	9.0	—	1.8	浅黄褐色	Cd系、内・外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Z・026
14-17A-2	8	17(A層)	坏	伊万里	6.0	2.5	3.95	白磁(透明釉)	—	Q・036
14-17A-3	8	17(A層)	皿	唐津	12.2	4.4	3.35	灰釉	見)胎土目跡2つ	Q・031
14-17A-4	8	17(A層)	皿	中国(景德鎮系)	—	4.8	残3.0	染付	—	Q・037
14-17A-5	8	17(A層)	碗	伊万里	9.8	4.8	7.4	染付	へら彫り堅筋文、「福寿」字	Q・018
14-17B-6	8	17(B層)	碗	中国(漳州窯系)	13.8	5.1	6.3	染付	遺構10・17-焼土層と接合	Q・024
14-17A-7	8	17(A層)	皿	中国(漳州窯系)	残17.9	12.9	残2.3	透明釉、上絵(赤・緑)	—	Q・017
14-17A-8	8	17(A層)	片口鉢	唐津	12.4	5.55	7.1	鉄釉	—	Q・016
14-17A-9	8	17(A層)	香炉	唐津	—	12.0	残7.55	鉄釉	三足	Q・026
14-17B-10	8	17(B層)	皿	中国(景德鎮系)	—	8.2	残1.5	染付	—	Q・044
14-17A-11	8	17(A層)	描鉢	越前	29.6	12.8	11.35	鉄泥	—	Q・032
14-17A-12	8	17(A層)	描鉢	越前	—	—	残10.7	—	—	Q・039
14-17A-13	8	17(A層)	四耳壺	信楽	11.2	—	残16.0	灰釉	—	Q・040
14-17A-14	8	17(A層)	鉢	越前	12.0	9.1	9.55	鉄泥	—	Q・033
15-17A-15		17(A層)	土師質皿	なし	9.5	—	2.45	鈍い黄褐色	Cd系、口)つまみ上げ	Q・029
15-17B-16		17(B層)	土師質皿	あり	9.0	—	2.15	淡灰褐色	C系、外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Q・042
15-17B-17		17(B層)	土師質皿	なし	9.0	—	2.05	淡褐色	C系、口)つまみ上げ	Q・041
15-17B-18		17(B層)	土師質皿	なし	9.5	—	残2.1	淡灰褐色	D系	Q・019
15-17B-19		17(B層)	土師質皿	あり	9.8	—	2.55	淡灰褐色	Cd系	Q・020
15-17A-20		17(A層)	土師質皿	なし	10.2	—	1.8	淡褐色	D系、底)植物のようなものの圧痕	Q・035
15-17A-21		17(A層)	土師質皿	あり	9.8	—	2.2	鈍い黄褐色	C系、内・外)多量の油脂付着	Q・034
15-17A-22		17(A層)	土師質皿	なし	10.9	—	2.4	淡灰褐色	Dc系、外)指頭圧痕	Q・030
15-17A-23		17(A層)	土師質皿	あり	11.4	—	2.0	淡灰褐色	Dc系、外)指頭圧痕、内・外)多量の油脂付着	Q・025
15-17B-24		17(B層)	土師質皿	なし	11.2	—	2.6	鈍い黄褐色	Dc系、内・外)指頭圧痕、口)つまみ上げ	Q・043
15-17A-25		17(A層)	土師質皿	あり	11.8	—	残1.9	鈍い黄褐色	DあるいはDc系	Q・021
15-17B-26		17(B層)	土師質皿	あり	10.8	—	3.0	鈍い黄褐色	Cd系、外)指頭圧痕	Q・023
15-17A-27		17(A層)	土師質皿	あり	13.8	—	残2.15	淡褐色	DあるいはDc系、外)指頭圧痕	Q・022
15-17A-28		17(A層)	土師質皿	あり	11.15	—	2.95	灰黄色	Dc系、内)指頭圧痕、内・外)油脂付着	Q・028
15-17A-29		17(A層)	土師質皿	あり	10.6	—	2.45	淡灰褐色	C系、内・外)多量の油脂付着	Q・015
15-17B-30		17(B層)	土師質皿	なし	12.4	—	2.0	淡灰褐色	Dc系、外)指頭圧痕	Q・027
15-17A-31	8	17(A層)	焼壺	なし	6.9	6.0	11.15	淡褐色	刻印「ミナと藤左エ門」	Q・045
15-焼-1	8	焼土層	碗	伊万里	(11.0)	4.9	7.65	染付	—	Z・033
15-焼-2	8	焼土層	大皿	伊万里	39.0	21.8	7.5	青磁釉	高)蛇の目剥き	S・031
15-焼-3	8	焼土層	油壺	伊万里	—	5.3	残7.1	透明釉、上絵(赤)	遺構14と接合	Z・016
15-焼-4	9	焼土層	栗燭	唐津	—	5.0	残5.55	灰釉	台の部分	Z・018
16-焼-5	9	焼土層	輪花皿	伊万里	21.8	14.0	2.3	染付、口紅	—	Z・015
16-焼-6	9	焼土層	瓶	唐津	—	6.8	残9.6	緑釉、白泥、錆釉	—	Z・017
16-焼-7	9	焼土層	瓶	唐津?	—	7.8	残9.0	鉄釉、薬灰釉	—	Z・020
16-焼-8	9	焼土層	壺	越前	口縁14.5	—	残6.8	鉄泥	—	Z・025
16-焼-9		焼土層	土師質皿	あり	10.0	—	2.4	淡桃色	Cd系、内)指頭圧痕	Z・021
16-焼-10		焼土層	土師質皿	あり	10.6	—	1.8	淡褐色	Dc系、内)油脂付着	Z・024
16-焼-11		焼土層	土師質皿	あり	11.4	—	2.05	淡灰褐色	Dc系、内)油脂付着	Z・023
16-焼-12		焼土層	土師質皿	あり	11.0	—	2.2	浅黄褐色	Dc系、口)つまみ上げ	Z・022
16-焼-13		焼土層	土師質皿	あり	11.2	—	2.5	淡灰褐色	Dc系、口)油脂付着	Z・019
16-焼-14	9	焼土層	水指	伊賀	15.4	—	残11.7	灰釉	—	Z・031
16-焼-15	9	焼土層	水指	伊賀	—	21.0	残11.85	外)灰釉	—	Z・030
16-焼-16	9	焼土層	丸瓦	越前(赤瓦)	長さ残12.0	幅8.8	4.7	鉄泥	—	Z・034
16-19-1	9	19	碗	伊万里	8.8	—	残5.3	染付	—	G・019
16-19-2	9	19	小坏	伊万里	6.4	2.6	4.35	染付	—	G・021
16-19-3	9	19	碗	伊万里	10.4	—	残6.3	染付	—	G・018
16-19-4		19	土師質皿	なし	10.3	—	1.9	淡褐色	Dc系、外)指頭圧痕	G・023
16-19-5	10	19	土師質皿	なし	10.0	—	2.45	淡灰褐色	Dc系、外)指頭圧痕	G・024
16-19-6	9	19	碗	伊万里	9.0	5.4	5.55	染付、口紅	遺構17-焼土層と接合	G・017
16-19-7	9	19	碗	伊万里	9.6	4.6	6.6	青磁釉	—	G・020
16-19-8		19	土師質皿	あり	11.2	—	残2.2	灰白色	Dc系、外)剥離し荒れている	G・025
16-19-9		19	土師質皿	あり	10.0	—	1.9	橙褐色	Cd系、外)指頭圧痕	G・026
17-24-1	9	24	皿	唐津	—	4.7	残2.6	銅緑釉	見)蛇の目剥き、高)畳付に砂目痕4つ	G・022
17-包-1	9	最上層(B10X)	船徳利	備前	—	18.1	残6.4	鉄泥	底)刻印	Z・027
17-包-2		最上層(A10X)	土師質皿	なし	10.0	—	1.65	灰白色	Cd系	Z・028
17-包-3		最上層(B10X)	土師質皿	あり	11.4	—	2.05	鈍い褐色	Dc系、内)油脂付着	Z・029

- 註 1 「成形・調整・その他」の項目では次の略称を使用している。口)→口縁、内)→内面、外)→外面、見)→見込、底)→底面
2 土師質皿の分類については、福井県埋蔵文化財調査報告第118集『福井城跡－JR北陸線外2線連続立体交差事業(高架側道5号線)に伴う調査－』2011を参照。

第2節 汽車土瓶

明治期から昭和30年代まで、駅で弁当とともに販売されていたお茶の容器が汽車土瓶である。土瓶形をしており、中にお茶を入れ、湯呑とセットで販売されていた。遺構14からは汽車土瓶が多数出土しており、不用になった汽車土瓶の廃棄土坑と考えられる。ここでは、本体・蓋・湯呑各2点を図示したが、これらは必ずしもセットをなすものではない(第18図)。

土瓶本体(1・2) ロクロ挽きで成形後、底を削り、耳と注ぎ口を接合している。「ス」と呼ばれる茶漉し部の穴は3つあけられている。側面には「横川」(1・2)「をぎのや」(1)「おぎのや」(2)の文字を鉄で描き、外面の口縁から腰部半ばまで灰釉を掛けている。文字は駅名や販売業者名を示している。2は腰部に重ね焼きの痕跡が残る。

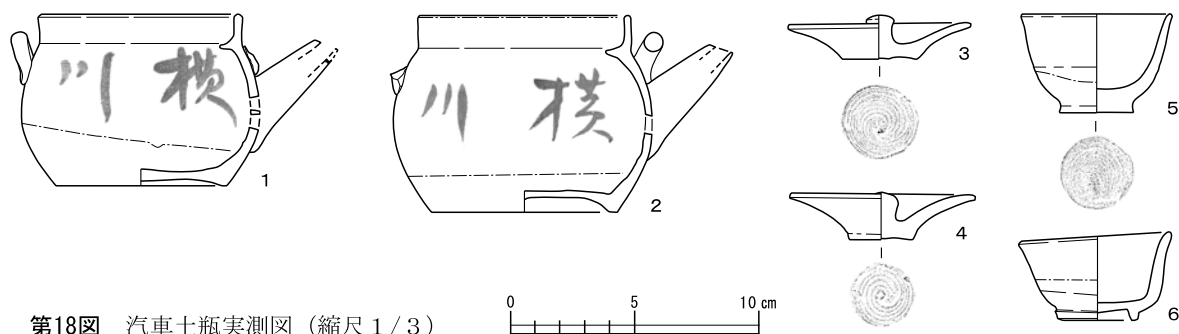
蓋(3・4) 底部に糸切痕が残し、上面にのみ灰釉が掛かる。

猪口(5・6) 5はベタ高台で糸切り痕が残る。6は削り出し高台である。ともに内・外面の腰部半ばまで灰釉を掛けている。

遺構14から出土した汽車土瓶の銘文を見ると、北関東から長野県・新潟県にかけての、信越線沿線の駅で販売されたものが中心である(第4表)。当時、車内で出たゴミは座席の下などに置かれ、列車の終着駅で回収・廃棄されていた。大正4年(1915)に北陸線と信越線が接続すると、上野と福井を結ぶ長距離列車が数年間運行されており、これらの汽車土瓶は、この時期に廃棄された可能性が高い。(註)

註

『公認汽車汽船旅行案内第245号』旅行案内社1915には、上野発・福井行の夜行列車のダイヤが掲載されている。大正10年(1921)の時刻表には、既にこの列車が見られないことから、大部分の汽車土瓶の年代がこの期間に限定できる。



第18図 汽車土瓶実測図(縮尺1/3)

第3表 汽車土瓶観察表

挿図番号	図版番号	遺構	器種	法量 (cm)			釉薬・装飾	成形・調整・その他	実測No.
				口径	底径	高さ			
18-1	9	14	汽車土瓶	8.1	6.8	6.9	灰釉、鉄絵	外)鉄絵「横川」「をぎのや」	G・032
18-2	9	14	汽車土瓶	8.5	7.4	7.9	灰釉、鉄絵	外)下部に重ね焼き痕、鉄絵「横川」「おぎのや」	G・029
18-3	9	14	汽車土瓶蓋	7.2	2.9	1.3	灰釉	糸切り痕	G・031
18-4		14	汽車土瓶蓋	7.4	2.5	1.8	灰釉	糸切り痕	G・028
18-5	9	14	汽車土瓶猪口	5.9	2.9	4.0	灰釉	ベタ高台・糸切り痕	G・027
18-6	9	14	汽車土瓶猪口	6.0	3.2	3.5	灰釉	削り出し輪高台	G・030

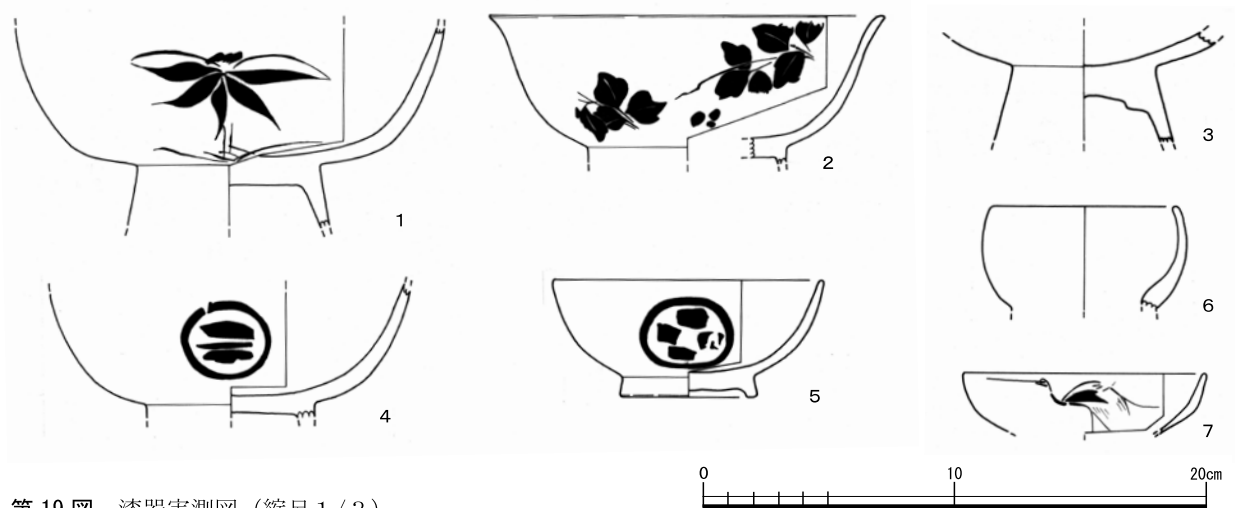
第4表 遺構14出土汽車土瓶銘文一覧

No.	駅名	販売者名等	点数	No.	駅名	販売者名等	点数	No.	駅名	販売者名等	点数
1	高崎	松本	6	8	長野	なづ免	3	15	をかざき(岡崎)		1
2	高崎	やじま	6	9	長野	中嶋	2	16	まいはら(米原)		1
3	高崎	不明	12	10	ながの(長野)		1	17	赤羽	津々井	1
4	横川	をぎのや	13	11	直江津	山崎や	5	18	なごや(名古屋)	不明	1
5	横川	おぎのや	2	12	軽井沢	油屋	3	19	不明	不明	5
6	大宮	門奈	14	13	志のの井(篠ノ井)	さいとう	1				
7	熊谷	秋山亭	7	14	八王子	五川亭	1				

第3節 木製品

木製品は確認したもののうち、状態の良好な25点を図示した(第19～21図)。内訳は漆器7点(19-1～7)、下駄(20-1)、柱2点(20-2・3)、箸7点(21-1～7)、切匙(21-8)、把手(21-9)、箱物(21-10)、加工木3点(21-11～13)、匙(21-14)、木札(21-15)である。以下、種別ごとに説明する。

漆器(19-1～7) 1は高台が高く体部が大振りなもので、飯椀だと考えられる。2は体部が外反する椀である。3は高台部の破片で、3cmと高いことから飯椀あるいは腰高だと考えられる。4は口径が大きい割に器高が低く、体部も1ほど厚くなく、汁椀だと考えられる。5は汁椀だと考えられる。6は高台部以下が削平されたものと考えられ、体部が内湾する椀である。7は高台部を欠損する体部破片である。上塗りは、内・外面とも黒色のものが5点、内面が赤色で外面が黒色のものが2点ある。漆絵はすべて外面のみに描かれ、植物文が多いが鶴・矢・巴なども見られる。使用色は、4・5の外輪と7が黄色でそれ以外は赤色である。



第19図 漆器実測図(縮尺1/3)

第5表 漆器観察表

挿図 番号	図版 番号	遺構	出土遺構の 主な遺物の 時期	器種	上塗							法量 (cm)				備考	実測 番号
					内面	外面	漆絵			口径	器高	高台径	高台高				
							場所	色	種類								
19-1	11	17(A層)	17c初～前	飯椀	黒	黒	外		赤	植物	絵	(16.8)	(8.0)	(8.0)	(2.5)	歪み激しい	12
19-2	11	17(A層)	17c初～前	飯椀	赤	黒	外	全面	赤	植物	絵	15.6	(5.8)	(8.0)	(0.6)		11
19-3	11	17(A層)	17c初～前	飯椀?	黒	黒	無					(10.3)	(4.0)	(7.0)	(3.0)	高台部破片	6
19-4	11	17(A層)	17c初～前	汁椀	黒	黒	外		黄、赤	一本矢	○紋	(14.2)	(4.5)	(6.8)	(0.5)	歪み激しい	2
19-5	11	17(A層)	17c初～前	汁椀	黒	黒	外	2	黄、赤	四つ石	○紋	10.7	4.7	5.4	0.8		1
19-6	11	17(A層)	17c初～前	椀	黒	黒	無					7.2	(4.2)	(5.6)	-	高台部削平?	8
19-7	11	10	17c後	杯	赤	黒	外		黄	鶴	絵	9.6	(2.4)	-	-	歪み激しい、高台部欠損	9

下駄(20-1) 一木作りの連歯下駄で、平面形は若干隅丸の長方形である。

柱(20-2・3) 遺構31・32の柱根で、芯を端の方に持った角材である。2は表面の仕上げが若干粗く凹凸が残っているが、3は平滑に仕上げられている。ともに上端部は腐朽しており、遺構廃絶時に切断されたような痕跡は確認できない。

箸(21-1～7) 長さ23.6cm～27.5cmで、平均は25.2cmである。断面形が方形のものと、円形に近いものがある。

切匙(21-8) 持ち手側の先端が角を面取りされ、山型となる。平面形はナイフ形を呈する。

把手(21-9) 曲物や桶などの把手ではないかと考えられる。断面形は、かまぼこ形を呈する。

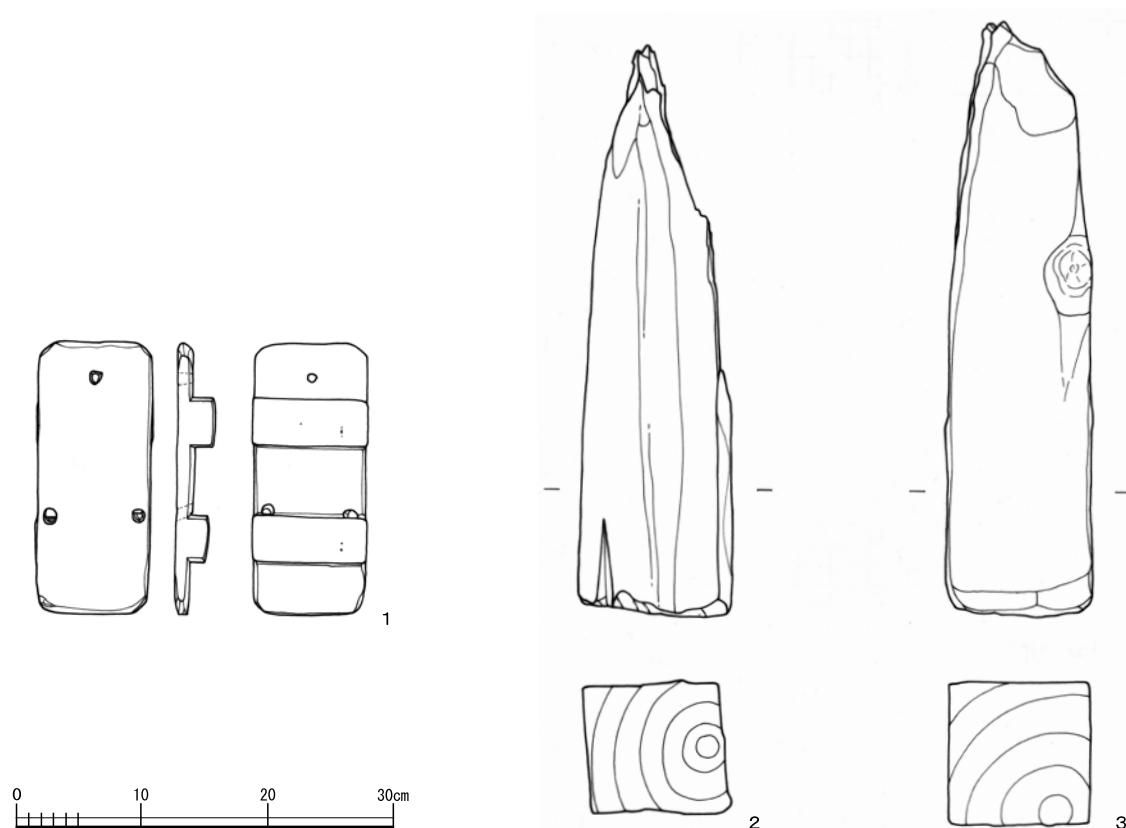
中央と両端近くの3箇所に孔が開く。

箱物 (21-10) 膳の脚部下半の破片である。

加工木 (21-11) 11は長方形の板材で、一方の短辺が他の部材と結合させるため凹状に加工され、側面に木釘の孔が1個開く。横断面形は平坦だが、縦断面形は三角形に近く、他の部材との結合部は、段を作ってまた厚くなる。12は扁平な板材で、下部側面に結合のための孔が開く。13は角材の一端を細くして2cmほど突出させ、他の一端は欠けているが、中央部が抉られ二股になっている。

匙 (21-14) 柄の端からゆるやかに広がり、先端は平面形が丸ではなく、長方形を呈し、断面形は平坦で丸みは無い。

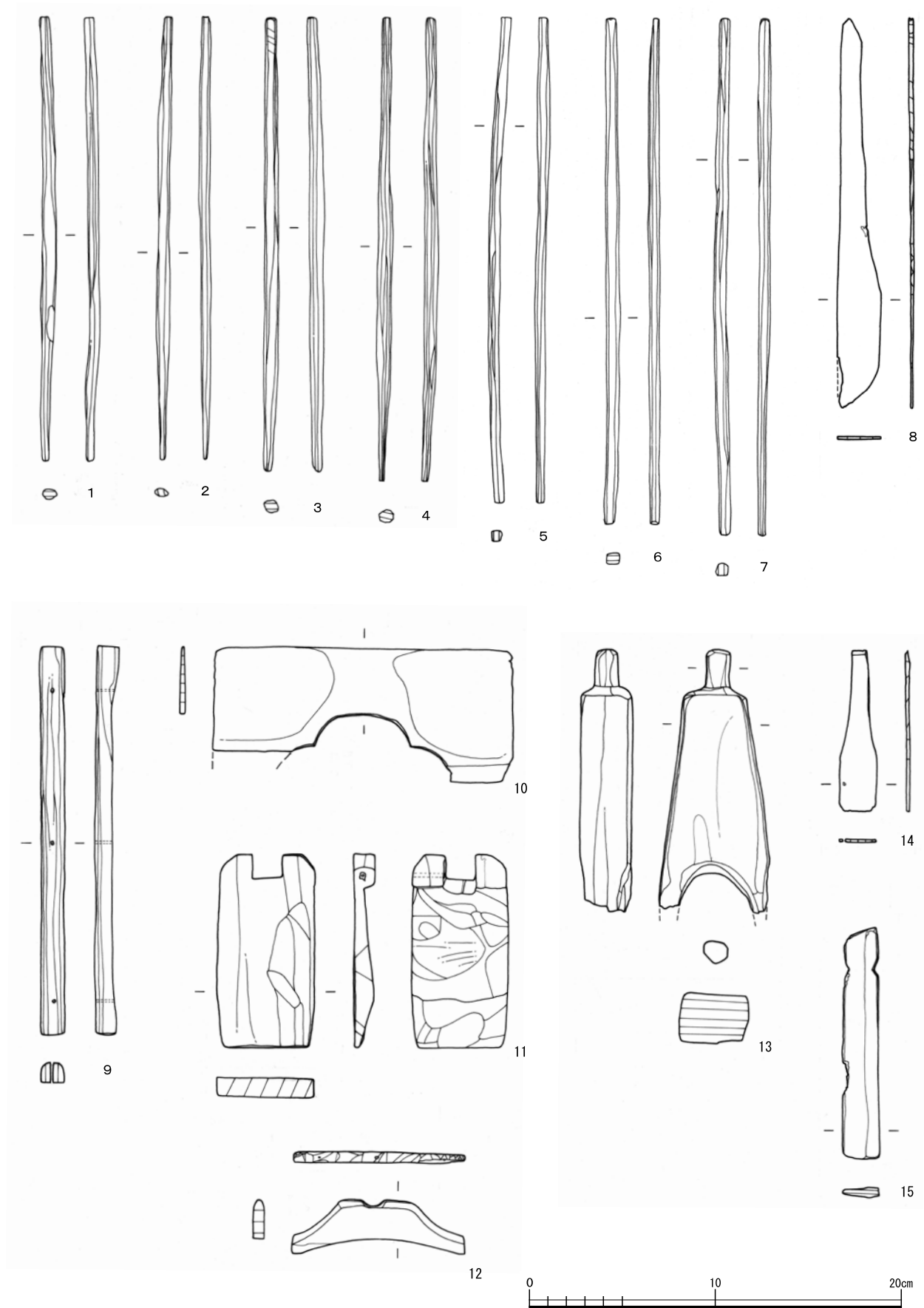
木札 (21-15) 墨痕は見られないが、上部両側縁に切り込みがあり、荷付札と考えられる。



第20図 木製品実測図1（縮尺1/6）

第6表 木製品観察表

挿図番号	図版番号	遺構	出土遺構の主な遺物の時期	種類	法量 (cm)			備考	実測番号
					長	幅	厚		
20-1	11	17(A層)	17c初	下駄	21.5	8.8	2.9		6
20-2	11	32	17c後	柱	(46.8)	11.7	11.3		1
20-3	11	31	17c後	柱	(44.9)	11.3	10.6		2
21-1	11	19	17c後	箸	23.6	0.8	0.6		12
21-2	11	19	17c後	箸	23.6	0.7	0.6		13
21-3	11	17(A層)	17c初	箸	24.2	0.8	0.7		18
21-4	11	19	17c後	箸	24.7	0.8	0.8		9
21-5	11	17(A層)	17c初	箸	25.8	0.6	0.6		17
21-6	11	17(A層)	17c初	箸	26.9	0.8	0.6		16
21-7	11	17(A層)	17c初	箸	27.5	0.7	0.6		15
21-8	11	17(A層)	17c初	切匙	20.8	2.1	0.2		7
21-9	11	17(A層)	17c初	把手	20.7	1.3	1.2	孔3か所	8
21-10	11	19	17c後	箱物	16.0	7.1	0.3		10
21-11	11	19	17c後	加工木	10.4	5.2	1.2	木釘穴1か所	14
21-12	11	17(A層)	17c初	加工木	9.2	2.3	0.6	孔1か所	5
21-13	11	19	17c後	加工木	(14.0)	5.8	2.7		11
21-14	11	19	17c後	匙	8.6	2.0	0.2		4
21-15	11	10	17c後	木札	12.3	2.0	0.6		3



第21図 木製品実測図2 (縮尺1/3)

第4節 金属製品

金属製品は、確認したもののうち比較的状态の良好な11点を図示した(第22図)。内訳は、鍬(1)、切羽(2)、釘3点(3～5)、飾金具(6)、錘(7)、襖引手金具3点(8～10)、鍋吊金具(11)である。以下、種別ごとに説明する。

鍬(1) 刃部の長い定角型の鍬である。

切羽(2) 遺存状態が悪く、周縁の「こきざみ」の有無は不明である。

釘(3～5) 釘には巻頭釘(大巻)と頭巻釘(小巻)がある。その区分は不明確であるが、現代の和釘では頭幅と身幅の比率2.5:1程度を境として分けられているようである。その分類を適用するならば、釘(3～5)はいずれも巻頭釘(大巻)となる。

飾金具(6) 三葉形の透かし孔があるために飾金具とはしたものの性格不明の製品である。

錘(7) 歪な円形を呈する扁平なものであり、素材の塊を押し潰しただけの製品である。

襖引手金具(8～10) いずれも長方形で大きさが揃う。これらのうち残存状態の悪い10は9からはずれた部品である可能性もある。また、いずれも出土位置が同一地点の17世紀中葉～後葉の遺物を含む焼土層中であることから、大火などにより焼け落ちた襖に伴うものであったことが考えられる。なお、この時期に調査区周辺が罹災した火災としては、寛文九年(1669)の寛文大火が知られる。

鍋吊金具(11) 直径19cm程度の鍋の吊手とみられる。吊手部分の断面は扁平なレンズ形である。

第5節 石製品

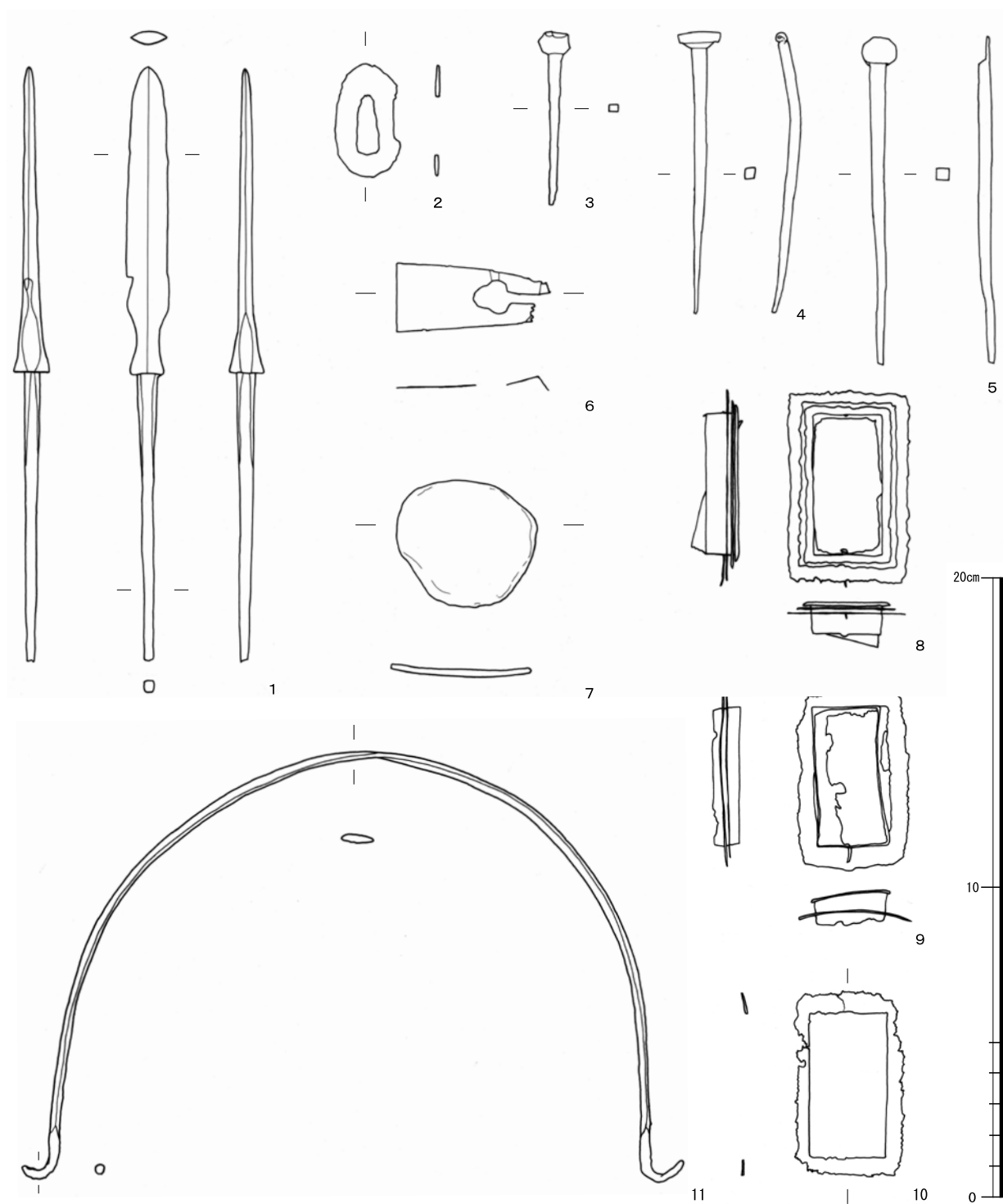
石製品は、確認したもののうち39点を採取し、そのうち状態の良好な15点を図示した(第23・24図)。内訳は、茶臼(23-1)、バンドコ(23-2～6)、盤(23-7)、容器状製品(23-8・9)、重石(23-10)、基石(23-11)、硯(24-1・2)、砥石(24-3・4)である。以下、種別ごとに説明する。

茶臼(23-1) 上臼の擦り面のみの破片である。

バンドコ(23-2～6) 越前地方に通有の笏谷石製の行火である。上部と前面が開口し、上部は蓋で閉じる。前面の開口部は複数の柱で区切られ、方形孔が並ぶように見える。平面形がD形で平らな面を正面とするもの(D型)と、平面形が楕円形で一方の長辺を正面とするもの(楕円型)があり、D型→楕円型の順に出現するようであるが、使用時期はほぼ併行する。この他、前面のみ大きく開口する手焙火鉢形のもの(手焙型)もあるが、出現は先行的であり、D型とほぼ併用されるようである。2は蓋の破片である。3は開口部の一部(方形孔)が確認される体部片である。方形孔は通常より幅が狭い。楕円型とみられる。4は楕円型の体部片である。背面中央付近にも方形孔が開けられている。5・6は小型品で、体部片と底部片であるが同一個体か否かは不明である。形状はともに楕円型とみられるが、6については平面形が円形となる可能性もある。バンドコは、通常少なからず被熱により変色し赤みを帯びたり、煤けて黒ずんだりしている。しかし、小型品は変色が認められるのは稀で、淡く緑色を帯びた青い色調を保つ良好な石材のことが多い。また、小型品の蓋は装飾や透かし孔を持つものが多いため、香炉と認識すべきかもしれない。

盤(23-7) 平面形が円形で、底面三か所に脚が付く。体部の大半を欠失する。笏谷石製である。

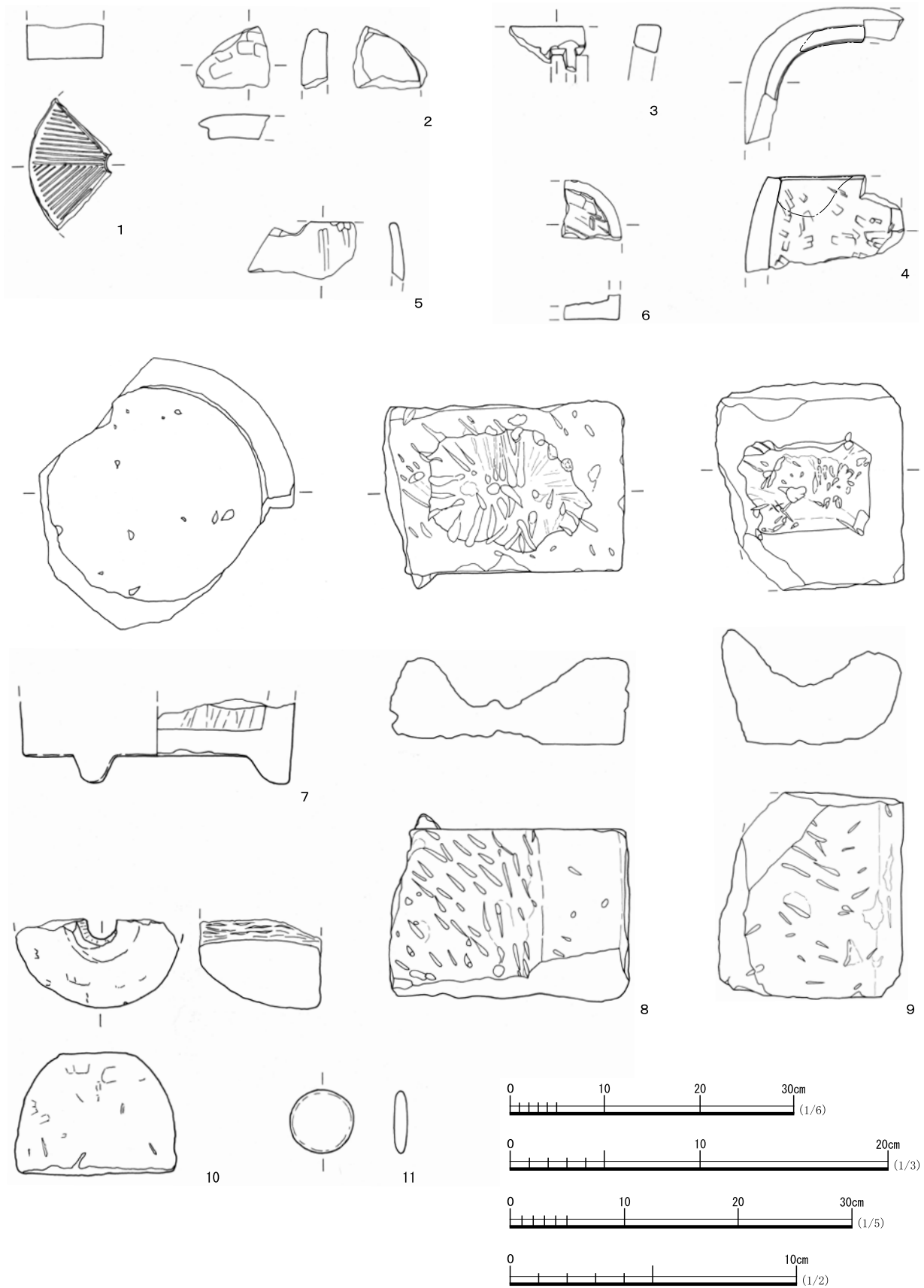
容器状製品(23-8・9) とともに笏谷石の転用石材を容器状に割り抜くようにして仕上げた製品である。8は囲炉裏石などの体部片を、9は無稜型の棟瓦片を、それぞれ転用したものと考えられる。用途については不明である。



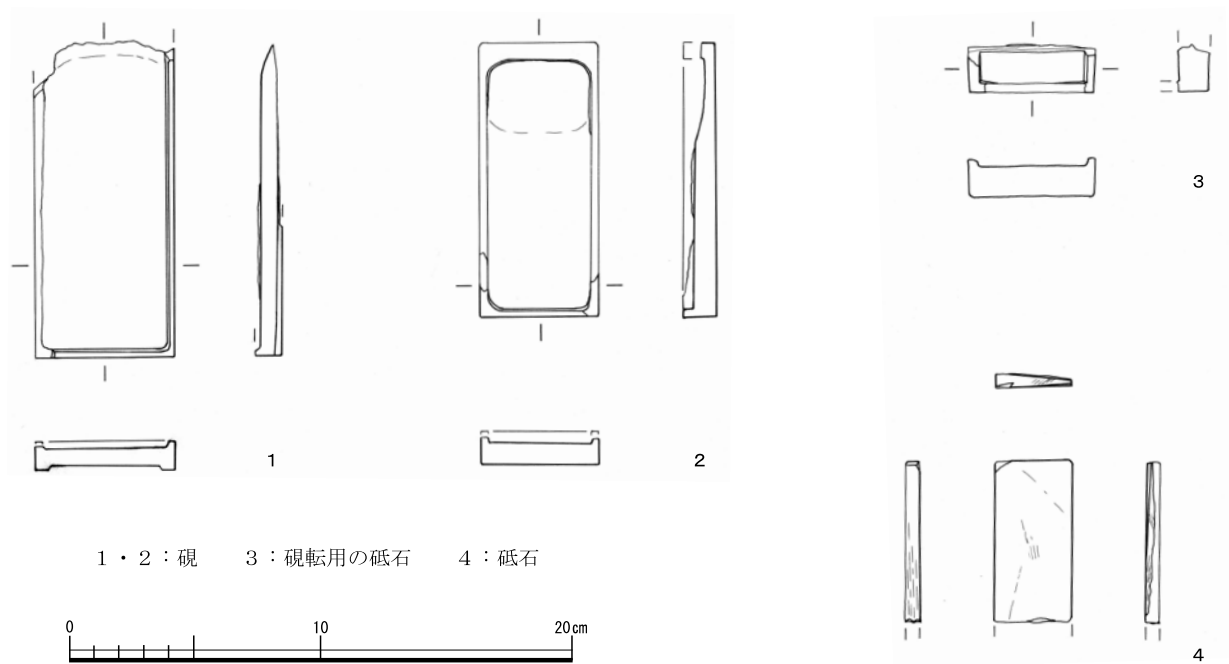
第22図 金属製品実測図（縮尺1/2）

第7表 金属製品観察表

挿図番号	図版番号	種別	出土地点		計測値 (cm)			材質	備考	出土遺構の主な遺物の時期	実測番号
			グリッド	遺構・層位							
22-1	10	鏃	A・B-10	17(A層)	長19.3	刃部長7.9	刃部幅1.2	鉄	定角型	17c初～前	9711-M07
22-2	10	切羽	J-9	04	高3.6	幅2.0	厚0.15	銅		17c中～後	9711-M04
22-3	10	釘	A-9	02	長5.7	幅0.3	頭幅0.8	鉄	巻頭釘(大巻)	19c中	9711-M08
22-4	10	釘	B-10	17(A層)	長9.1	幅0.3	頭幅1.3	鉄	巻頭釘(大巻)	17c初～前	9711-M03
22-5	10	釘	B-10	02	長10.5	幅0.4	頭幅1.1	鉄	巻頭釘(大巻)	19c中	9711-M10
22-6	10	飾金具	A-10	17(焼土層)	長5.0	幅2.3	厚0.05	銅		17c中～後	9711-M02
22-7	10	錘	A-9	02	径4.5前後	厚0.25		鉛	円盤形	19c中	9711-M11
22-8	10	襖引手金具	A-10	17(焼土層)	縦6.3	横3.9	奥行1.1	銅	長方形	17c中～後	9711-M01
22-9	10	襖引手金具	A-10	17(焼土層)	縦5.9	横3.9	奥行1.0	銅	長方形	17c中～後	9711-M12
22-10	10	襖引手金具	A-10	17(焼土層)	縦6.0	横3.5	厚0.1	銅	長方形・一部のみ	17c中～後	9711-M06
22-11	10	鍋吊金具	B-10	17(A層)	高14.4	横21.3	吊手幅1.1	鉄	吊手部分扁平	17c初～前	9711-M09



第23図 石製品実測図1 (縮尺1~4・10: 1/6、5~7: 1/3、8・9: 1/5、11: 1/2)



第24図 石製品実測図2 (縮尺1/3)

第8表 石製品観察表

挿図番号	図版番号	種別	出土地点		計測値 (cm)			石材	備考	出土遺構の主な遺物の時期	実測番号
			グリッド	遺構・層位	復元径	残存高	幅 奥行/厚				
23-1	12	茶臼	A-10	17(焼土層)	19.2	3.6		輝緑岩	上臼、搗り面部のみ	17c中～後	9711-S15
23-2	12	バンドコ	J-9	11(最下層)	(6.9)	(2.4)	(5.9)	笏谷石	蓋小片	16c末～17c初	9711-S06
23-3	12	バンドコ	J-9	"	(7.2)	(4.2)	2.5	笏谷石	体部片、煙り出し孔付近	"	9711-S08
23-4	12	バンドコ	J-9, B-10	11(最上層)	(16.7)	(10.4)	(14.5)	笏谷石	体部片、背面に方形煙り出し孔	"	9711-S11
23-5	12	バンドコ	I・J-9	04(上層)	(5.5)	(3.0)		笏谷石	小型品、体部片	17c中～後	9711-S05
23-6	12	バンドコ	I・J-9	04(上層)	(3.15)	(1.3)	(1.3)	笏谷石	小型品、底部片	"	9711-S07
					底径		高				
23-7	12	盤	J・A-9、 A・B-10	17(A層)	14.1		(4.3)	笏谷石	円形、脚付(三脚)、底部片	17c初～前	9711-S10
					縦	横	高				
23-8	12	容器状製品	J-9	02(中層)	14.3	21.0	7.6	笏谷石	石材転用	19c中	9711-S14
23-9	12	容器状製品	J-9	10	16.3	18.3	10.3	笏谷石	石材転用	17c後	9711-S12
					長径	短径	厚/高				
23-10	12	重石	A-10	17(焼土層)	(17.2)		13.1	笏谷石	半球形、底面平ら、中央に孔	17c中～後	9711-S13
23-11	12	碁石	B-10	最上層	2.2		0.45	粘板岩	黒色	19c中～後	9711-S09
					縦	横	厚/高				
24-1	12	硯	I・J-9	04(下層)	(12.4)	5.5	1.1	粘板岩	海の縁欠損	17c中～後	9711-S01
24-2	12	硯	J-9	02(上層)	10.7	4.7	1.3	粘板岩	縁欠損	19c中	9711-S02
24-3	12	砥石	A-10	02(中層)	(1.9)	5.0	(1.5)	粘板岩	硯から転用	19c中	9711-S03
24-4	12	砥石	A-9	17(A層)	(6.4)	3.0	0.6	泥岩 (粘板岩)		17c初～前	9711-S04

重石 (23-10) 大半を欠失するが、半球形に近い形状となるものとみられる。底面は平らに整形されている。中央には穿孔が施される。重石に使われたものとみられるが、その形状から単なる押さえなどだけではなく、何らかのものを立てる際に利用した可能性も考えられる。笏谷石製である。

碁石 (23-11) ほぼ正円形に整形された黒色の碁石である。碁石の大きさは白石 21.9mm (7分2厘)・黒石 22.2mm (7分3厘) であり、現代では厚さ 6～14mm 程度のものが使用されている。11 の大きさも同様であるが、厚さが 5mm に満たない。

硯 (24-1・2) 1 は海から向うの縁を欠失する。背陰の手前側を削り込むようにして左右の硯側に脚を削り出している。2 は全形をうかがえるが、縁の大半を欠失している。

砥石 (24-3・4) 3 は硯の手前側の硯側を磨り切り、砥石に転用したものである。4 は片側を欠失した扁平な製品である。ともに仕上げ砥として使われたものとみられる。

第5章 まとめ

ここでは、遺構群の年代の変遷を、福井城下絵図を参照しながら見ていくことにする(第4・25図)。

I期 柴田勝家によって築城された北庄城に関連する16世紀末の遺構群である。調査区南部に遺構12があり、次の時期にも同じ場所に塀が作られていることから、ここが屋敷地境であったと考えられる。遺構12より北の屋敷地2には、2基の井戸が作られる。また、南の屋敷地1の地境溝の側には、ゴミ穴と考えられる遺構04がある。

II期 福井城築城の時期から17世紀半ばまでの遺構群である。遺構12と同じ位置に塀と考えられる遺構41が作られ、ここでは福井城築城時に、北庄城の屋敷地割りが踏襲されたことが分かる。慶長18年(1614)頃の城下を描いた「北之庄城郭図」1309にも、この屋敷地境が描かれている。また、屋敷地2には遺構17が作られるが、調査範囲が狭く、土坑か溝か判然とせず、屋敷地内での機能も不明である。

III期 寛文9年(1669)の寛文大火を挟む17世紀後半の遺構群である。II期の遺構面に盛土して整地し、遺構17を埋め立てた後、中央部を掘り込み、園池と思われる遺構19が築かれる。当初は、調査区の東壁を越えて伸びる広い石敷を持っていたが、後に東側部分を埋め立てて石の護岸を行い、規模を縮小している。その後、遺構19の南側に寛文大火に伴うと考えられる焼土を盛り上げ、その上に塀と考えられる遺構40が作られる。遺構19は17世紀末には埋められたようである。

城下絵図に記された屋敷地の間口を比較すると、寛文10年(1670)と貞享2年(1685)の間に、屋敷地1と2の境が2間2尺あるいは1間4尺ほど南に移動していることが読みとれる(第25図・第9表)。寛文大火後の復旧作業に伴うものであろう。このことから、遺構41より北にある遺構40は、屋敷地境の塀とは考えにくく、屋敷地2内の区画塀と想定される。また、この時期には調査区中央に多数の土坑が切り合って作られ、多くはゴミ穴と考えられる。

遺構17のA層や焼土層には、青磁大皿や水指、四耳壺・香炉・茶臼など、座敷飾りや宴席・茶の湯の道具として使われた遺物が多く含まれている(第14～16図)。これらは必ずしも屋敷地2に伴うものとは限らないが、近世前期の上級武家のハレの場のしつらえがうかがえる貴重な資料である。なお、貞享3年(1686)以前、屋敷地1の堤安左衛門は900石、2の松原角左衛門は1,100石と、共に家老に次ぐ高い知行を持っていたが、同年の藩領半減(貞享の大法)に伴い、両者の知行も半減されている。^(註)

この後、18世紀から19世紀初めにかけての遺構は確認されていない。理由としては、近代の削平や攪乱によって失われたことが大きいと考えられる。またそれ以外に、この調査区は屋敷地の表門に近い場所に位置していることから、玄関と表門に挟まれた前庭にあたっていたことも考えられる。その場合は、もともと遺構が作られにくい環境にあったことが想定される。

IV期 幕末期から明治期初め、19世紀半ばから後期の遺構群である。このころ、調査区の広い範囲が盛土によって埋められている。調査区中央にはゴミ穴と考えられる遺構02が作られている。文化8年(1811)の「福井分間之図」1340では、この調査区のすぐそばに、屋敷地2の門があったようであるが、これに伴う通路などの遺構は見られない(第25図)。

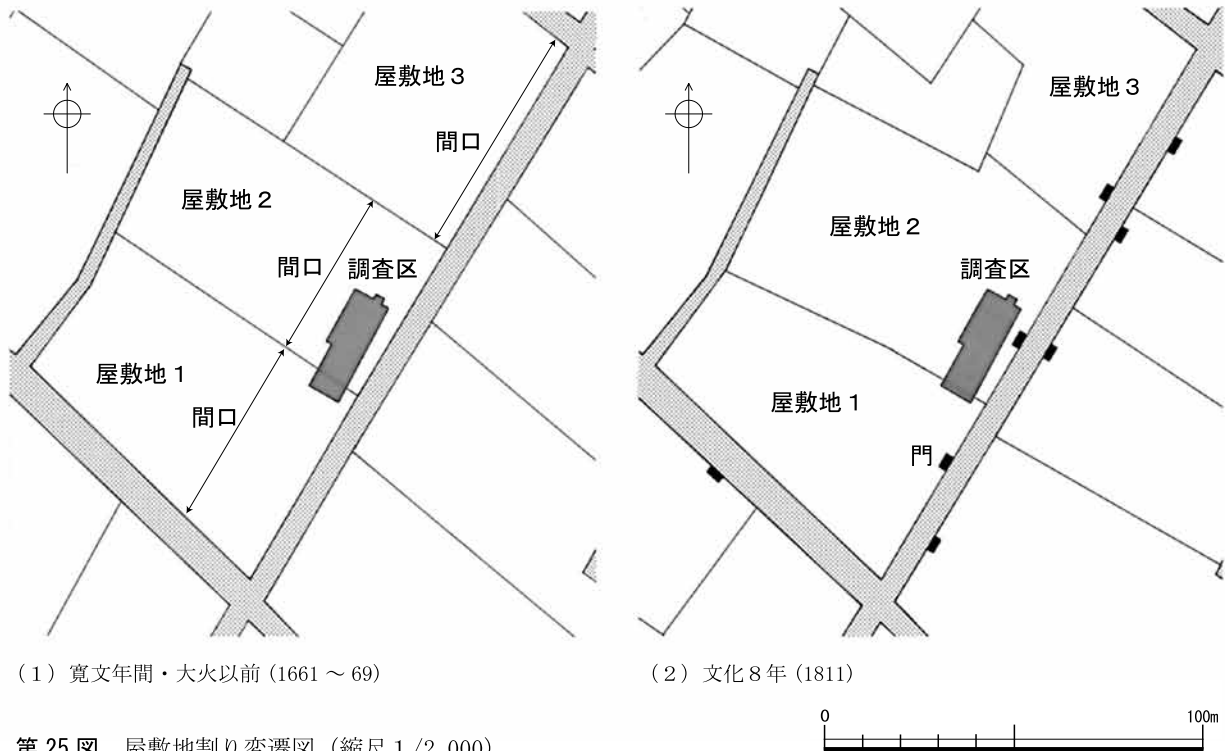
V期 官鉄の福井駅構内であった明治29年(1896)から昭和4年(1929)ころの、汽車土瓶を廃棄した遺構14が作られている。第26図は当時の駅構内の施設配置を示したものであるが、これによると調査区は駅の裏手にあたり、周囲には石炭置場や転車台など列車の補給や整備を行う施設が設けられていた。また、調査区付近の立会調査の際には、煉瓦製の基礎が確認されており、機関庫があったことも想定され

る。そのような立地環境から、列車から出た廃棄物の捨て場とされたものと考えられる。

今回の調査区は、屋敷地境を挟んだ2軒の武家屋敷地の端の部分にあたる。調査範囲が狭いため、この地点が屋敷地内でどのような性格を持っていたかについては、明らかにできなかった。しかし、同じ屋敷地中を福井駅部の工事に伴って調査しており、同報告の中でさらに考えていきたい。

註

知行高の変遷については、「給帳」(松平文庫)を参照。



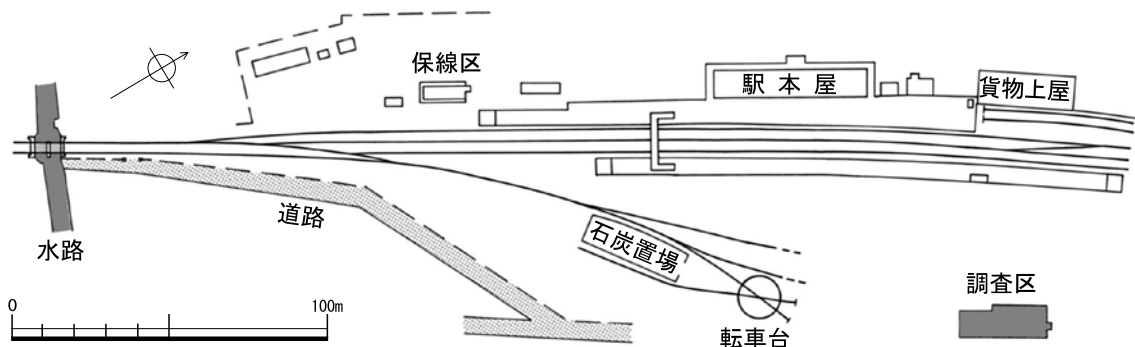
(1) 寛文年間・大火以前 (1661 ~ 69)

(2) 文化8年 (1811)

第25図 屋敷地割り変遷図 (縮尺 1/2,000)

第9表 調査区付近の屋敷地割りの変遷

年 代	屋敷地1		屋敷地2		屋敷地3		参照絵図名
	拝領者名	間口	拝領者名	間口	拝領者名	間口	
慶長18年(1614)頃	水戸 三七	30間	岸 内匠	24間	乙部 九郎兵衛	30間	「北之庄城郭図(北庄家中図)」1309
万治2年(1659)以前	堤 安左衛門	-	松原 角左衛門	-	榊原 十郎左衛門	-	「御城下之図」1314
寛文年間・大火以前 (1661 ~ 69)	堤 安左衛門	30間半	松原 角左衛門	25間	榊原 十郎左衛門	32間	「御城下絵図」1319
寛文10年(1670)	堤 安左衛門	30間半	松原 角左衛門	25間	榊原 十郎左衛門	32間	「御城下絵図」1317
貞享2年(1685)	堤 甚三郎	28間5尺	松原 三郎兵衛	27間2尺	榊原 十郎左衛門	31間4尺6寸	「福居御城下絵図」1320
正徳4年(1714)	笹治 兵庫	28件5尺	松原 角左衛門	27間2尺	榊原 十郎左衛門	31間4尺6寸	「御城下之絵図」1325
享和3年(1803)	松原	-	大関	-	宮北	-	「福井城下之図」1339
文化8年(1811)	中川	28間5尺	稲垣	27間2尺	花木	31間4尺5寸	「福井分限之図」1340
慶応年間(1865 ~ 68)	中川 潤	-	稲垣 治部	-	花木 右門	-	「御城下之図(福井城下絵図)」1342



第26図 福井駅構内の施設と調査区の位置図 (縮尺 1/2,400)

写 真 图 版



(1) 調査区周辺 (北より)



(2) 調査区全景



(1) 調査区全景 (南より)



(2) 調査区全景 (北より)



(3) 噴砂痕跡 (南より)



(4) 遺構 41 (東より)



(1) 遺構 19 および石堤 (東より)



(2) 遺構 19 および石堤 (北より)



(1) 遺構 19 南岸集石 (北より)



(3) 遺構 19 南岸集石下の木組み (東より)



(2) 遺構 19 南岸集石下の木組み (北より)



(4) 遺構 19 北岸階段 (西より)



(6) 石堤 (東より)



(5) 遺構 40 および石堤断面 (西より)



(1) 遺構 30 (西より)



(2) 遺構 31 (西より)



(3) 遺構 32 (西より)



(4) 遺構 33 (西より)



(1) 遺構 02 (西より)



(2) 遺構 04 (北より)



(3) 遺構 11 (東より)



(4) 遺構 25 (東より)



(5) 遺構 25 (西より)



11-02-1



11-02-2



11-02-5



11-02-6



11-02-1



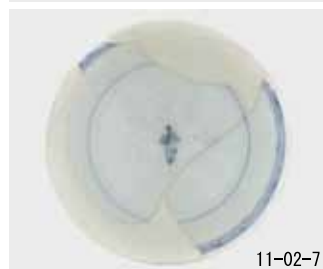
11-02-2



11-02-5



11-02-6



11-02-7



11-02-8



11-02-3



11-02-4



11-02-7



11-02-8



11-02-9



11-02-10



11-02-11



11-02-12



11-02-13



11-02-14



12-02-15



12-02-16



12-02-17



12-02-25



13-04-10



13-05-1



13-05-2



13-05-3



13-10-1



13-10-2



13-10-3



13-10-8



13-11-1



13-11-2



13-11-4



14-13-1



14-17A-2



14-17A-3



14-17A-4



14-17A-5



14-17B-6



14-17A-7



14-17A-8



14-17A-9



14-17B-10



14-17A-11



14-17A-12



14-17A-13



14-17A-14



15-17A-31



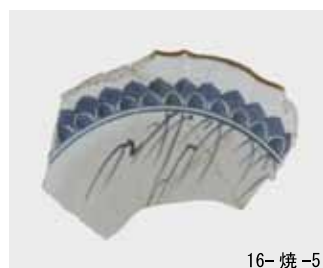
15- 焼 -1



15- 焼 -3



15- 焼 -2



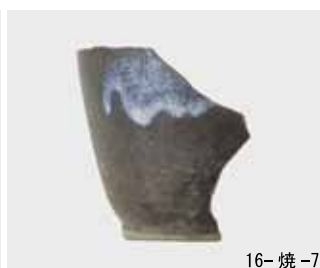
16- 焼 -5



15- 焼 -4



16- 焼 -6



16- 焼 -7



16- 焼 -8



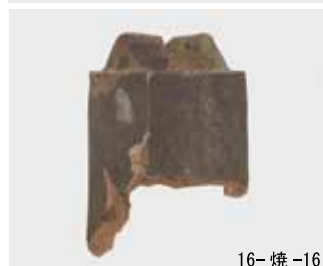
16- 焼 -8



16- 焼 -14



16- 焼 -15



16- 焼 -16



16-19-1



16-19-2



16-19-3



16-19-6



16-19-7



17-24-1



17-14-3



16-19-6



17-14-1



17-14-2



17-14-3



17- 包 -1



18-3



18-5



18-6



18-1



18-1



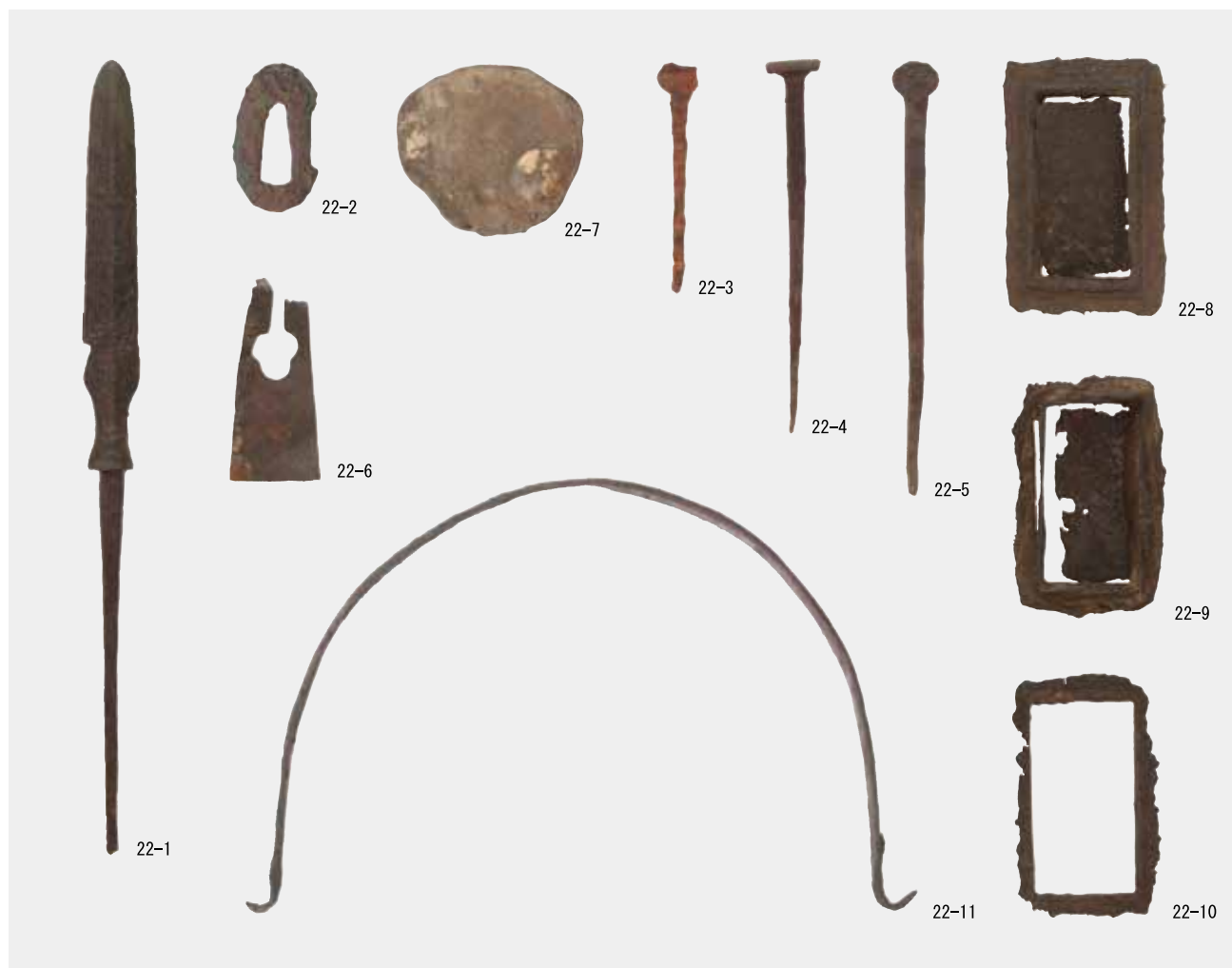
18-2



18-2



(1) 土師質皿(かわらけ)



(2) 金属製品



19-1



19-2



19-3



19-4



19-5



19-6



19-7



21-10



21-12



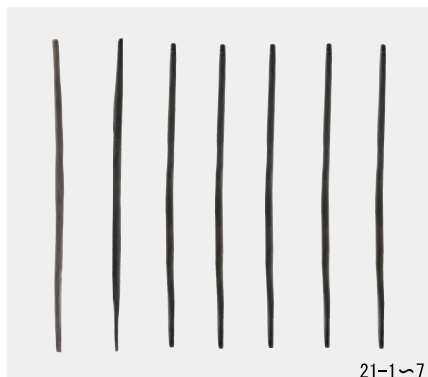
20-1



21-11



21-13



21-1~7



21-8



20-2



20-3



21-9



21-14



21-15



23-1



23-2



23-3



23-4



23-5



23-6



23-7



23-8



23-8



23-9



23-9



23-10



23-11



24-1



21-1 裏



24-2



24-3



24-4

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくいじょうあと							
書名	福井城跡							
副書名	J R 北陸線外 2 線連続立体交差事業（福井駅仮跨線橋工事）に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 124 集							
編集者名	中原義史							
著者名	本多達哉 中原義史 御嶽貞義							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町 4-10 Tel.0776-41-3644							
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふくいじょうあと 福井城跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 ちゅうおう 中央 1 丁目	18201	01141	36° 6′ 14″	136° 22′ 34″	19970911 ～ 19971108	473 m ² (表面積)	記録保存
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
福井城跡	城郭 城下町	近世	溝・柱列・井戸・園池遺構など		土器(土師質皿)・陶磁器・漆器(碗)・木製品(下駄・箸等)・石製品(茶臼・バンドコ・硯・砥石)・金属製品(鍬・釘・襖引手金具)など			
要約	J R 北陸線外 2 線連続立体交差事業に伴う、福井駅仮跨線橋工事地点での調査。調査区は、福井城百間堀の南東側にある曲輪「中ノ馬場」に位置する。調査区は 2 つの武家屋敷地にまたがり、福井城下絵図の記載と一致する屋敷地境の溝や柱列を確認した。また、園池遺構や井戸・多数の廃棄土坑を検出し、その年代の変遷を明らかにした。なお、近代福井駅に伴う廃棄土坑からは、多数の汽車土瓶を収集した。							

福井県埋蔵文化財調査報告 第124集

福井城跡

—JR北陸線外2線連続立体交差事業(福井駅仮跨線橋工事)に伴う調査—

印刷 平成24年3月12日

発行 平成24年3月16日

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 西川印刷株式会社
〒910-0856 福井市勝見3丁目6-13
